

かくて彦九郎は劔を杖いてあまねく四方に遊び、買豪長者と交りを結んだ。時しも、田沼意次が政を江戸に執つて風俗は大に亂れ、淫蕩奢侈の風、日は一日よりも甚だしかつたので、識者はみなこれを憂へた。

さて彦九郎は或時、室鳩巢の草した楠公論を縮き、正成が召に應じて直ぐ笠置に至つたことを諸葛亮孔明が蜀主三顧の後塵を出でたのに比べて遙かに度量が足らないと論じあるを讀んで怒髪天を衝き、『腐儒の徒、事を論ずる、何といふ迂濶なことであらう。皇國と唐土とは眞然として國體の趣を異にしてゐるではないか。斯様な不見識なことでは、よしや千萬卷の書を讀破したところで何の役に立つであらう。』と言ひざまその書を取つて堂下に投げ棄てた。

天明の末年、京都に大火事があつた。と、彦九郎は聞く間もあらせず、晝夜打ち續けに京都へと馳せ向ひ、夜中に木曾山中へさしかつた。すると數人の山賊は刃を抜き聯ねて彦九郎を脅かさうとした。ところが彦九郎は眼を瞑らし、破れ鐘の様な聲を張り上げて、『其方共は上野の高山彦九郎を知らぬか。畏れ多くも天朝に災あらせら

れると聞いて、馳せ參する途中である。身にはその方共の血で汚す様なやくざ刀は帯びて居ない。』と打呼ばれば、賊共は慄ひ上つてひれ伏したのであつた。『平生未だ一度も恐ろしいと思つた事は御座りませぬが、曾て木曾山中で「我は高山某である。』と怒鳴り、目を瞑らして私共を叱りました一男兒の面影は今になるまで眼についてゐて思ひ出してさへ身の毛のよだつ心地が致しまする。』とは當時の山賊の巨魁が後に捕へられて幕吏の前に自白した言葉であつた。

さる程に田沼氏は朝を罷め、松平定信(白河樂翁公)がこれに代つて政を執ることとなつたが、定信は常に心を政事に用ゐて前代の弊を改正することにのみ意を砕いた。これより先、彦九郎の祖母はなくなつたから、彦九郎は叔父の長藏と二人で祖母が冢の側に應を作つて三年の喪に服したのであつた。髪は亂れ、爪は伸び、憔悴骨立して、よその見る目もあはれであつた。とその事は江戸にも達したので、役吏は彦九郎の孝行を表彰しようとした。しかるに一方これを妬んで、『彦九郎は兄に對して人たるものゝ道を踏まない。』と讒言したものがあつたので、彦九郎は其筋へと呼び出された。

「刀劔を帯びるのは國に制定がある。汝、農人の身を以て常に兩刀を帯してゐるとは何事であるか。』『さればにて御座る。曩祖高山遠江守より拙者に至るまで二十餘代未だ嘗て一人の劔を帯ぬ者は御座らぬ。拙者に限り御咎められるとは心得申さぬ』朴訥で磊落な彦九郎が答辯は役吏の心を動かした。『汝は仕官を望むか。業とするところは何の技であるか。擊劔か、儒學か。』『士は如何に貧賤であらうとも、身を以て人に許すことは誠に以て容易では御座らぬ。君子の仕へるのは、その義を行ふ爲で御座る。道の行はれぬ以上は、少しも爵祿を受く可きにては御座らぬ。のみならず、學は人倫を明かにする所以であつて、士の道に志す者が悉く儒者とは申されぬ。拙者は平生書を讀んで御座れど、文士として名あることは望み申さぬ。よつて尋章摘句の事に拘泥致し申さぬ。また幼時から擊劔を好んで御座るが、技藝を以て身を立てるも拙者の望む所にては御座らぬ。よつて仕官も決して拙者の望む所では御座らぬ。』『是は成程文學者流ではないとしたところで道を以て自ら任じて居る以上は、よろしく儒者といふべきである。まあ、こゝに大學の講義をして見よ。』そこで彦九郎は大學の講

義をしたが、解釋分折、微に入り細を穿つて聞く者嘆服せざるはない。『聞きしに違はぬ大丈夫である。』と役吏は只管感じ入つて彦九郎はそのまゝ、免されたのであつた。さて此頃は露西亞人が度々蝦夷に往來して邊海頗る穩かでなかつたから、彦九郎は大層この事を憂ひ、慨然志を決して北海に遊ばうとし、その途すがら水戸を通つて藤田一正・立原萬等の諸名士に會ひ、此に忠君愛國主義の洗禮を受けて北に向うた。ところで下野の蒲生君平はいたく彦九郎の人と爲りを慕うてゐたが、此度その北遊を聞いて如何とかして彦九郎に會つて見たいと思ひ、陸奥の石巻まで行いたが、彦九郎がこゝを過ぎてから、はやくも十日を経て居ると聞いたのでそのまゝに引き還した。さて彦九郎は南部津輕を経て松前に至り、竟に蝦夷の土に入り、東西に奔走してなす所あらむとしたが、忽ちまた内地の事を憂ひ出して、少しの猶豫も成り難く、松前から船出した。順風に帆を孕ませて船飛ぶが如く、三日三夜で中國に達し、數月間を京都に費して、更に西海に遊んだ。しかるにまた外艦或は紀伊の大島浦に至り、或は筑前長門の近海に出没したので、彦九郎はちつとして居られない。早速身支度を

して京都に歸つたが、毎に三條橋の上に跪いて遙かに宮城を伏し拜み、「草莽の微臣高山彦九郎。」と啓して打ち過ぎるのであつた。である日、京都の郊外に遊んで足利尊氏の墓に詣り、憤激の餘り、その大逆を責めて、碑石を鞭ち叩いたこともあつた。また或る時鴨川の邊りを過ぎると甲の上に模様があつて尾の毛が鬚々としてゐる龜を捉へて弄んで居る童子があつたので、彦九郎は若干の金を與へてその龜を獲、伏原正二位に謁して天覽に供へ奉つたこともあつた。けれども彦九郎が憂世慨國の情は胸に餘つて、しかも意を當世に得ることが出來ず、再び西海に遊んで筑後久留米藩士林嘉膳の家に居たが、常に快々として樂しまない。何やら病を抱いて居る様に見えたが、ある日、持つてゐたところの書きものを取り出し、寸々に裂いて水中に投げた。嘉膳は驚いて、「永年力を盡くして集められたものを、一朝にして失はれるとは惜しいものでは御座らぬか。」といふと、彦九郎は「惜しいものには相違御座らねど、我が事今や了つたので御座る。惜しむには足り申さぬ。」といふ。よつて嘉膳は、「しかしながら、もし後世の者が、貴殿のことを不良を圖つてその揚句如何とも詮方なく、窮困の除り

自殺したのだとでも言ひ傳へたなら如何するで御座らう。」といふと、彦九郎は「成程それも御尤もの儀で御座る。」というて沈吟良久しい。さて嘉膳がその場を退くと間もなく、彦九郎は刀を抜いて腹を切つた。嘉膳は驚いて駆け付けた。彦九郎は刀を持つて端坐してゐる。鮮血は淋漓として泉の如くに流れた。「何とて斯様のことをなされたか。」と嘉膳は問うた。「拙者、不肖を省みず、常に國家に報いむと欲して忠を爲し義を爲した。以のものの、今やみな不忠不義の事となり了つて御座る。而してこれ全く拙者が智の及ばぬ結果にて御座る。今や、天が拙者を殺すので御座る。何卒、拙者の爲、天下の人に謝して頂きたう御座る。」と彦九郎は答へた。「けれども國には法が御座る。療治を加へられたい。」「いや、それには及び申さぬ。」「さりとて拙者が貴殿を宿めた上、貴殿が拙者の宅で自刃されたにも係はらず、これに療治を加へぬとあつては拙者もまた法を免れることが出來ない。此邊のことを酌み分けられたい。」「成程、左様で御座つたか。」「かくて彦九郎は東方を指して、「帝都及故國は此方面で御座らうか。」と問うたから、嘉膳は東北の方を示し、「あの方角にて御座る。」と教へると、彦九郎は

拍手再拜して涙を垂れ、さて嘉膳に對つて談笑自若としてゐた。間もなく醫者は來り、檢使は來つた。そして檢使の『何でこんなことをしたのか。』といふ問に對して、彦九郎の答へは、『氣が狂うたので御座る。』といつたのみであつた。その外はたゞ郷貫を告げたのみで、他には一言の語るものなく、また彦九郎が齎すところのものを檢べても毫しの疑ふべきものなく、たゞ天下の名山大川勝區の圖畫と忠臣孝子の行狀と諸名家が送つた所の詩文があるのみで、その中に彦九郎が自ら書いた、『我をわれと思し召すかや天皇のたまの御聲のかゝるこれしさ。』といふ國風があつた。かくてその翌日即ち寛政五年六月二十七日の曉かけて熱血慷慨の男兒高山彦九郎正之が四十七年の生涯は閉ぢられたのであつた。彦九郎が死してから數月、未だ新らしいその墓石の下に腹を屠つて彦九郎が跡を追うた心交の友唐崎常陸介も亦一代の血性男兒であつた。げにや、血性男兒の熱血は紅燃ゆる焰の如くに、熱血慷慨の男兒が墓下に流れ漲いで、夕の雲に響く遠寺の鐘聲はこよなう悽惋であつた。

蒲生君平

『楠公が湊川に戦死したのは、どうもその時機がはや過ぎた。生を全うして皇室を支へ奉ることを思はず、たゞ己れを潔うして名を售ることにのみ焦つたのは、眞の忠臣といふべきでない。』と一人は酔にまぎれて酒杯献酬の間に言ひ出した。『如何にも。』『如何にも』と甲賛し乙和して一坐には議論の花が咲いた。蒲生君平は廁の中にこの議論を聞いて居たが、平生忠義の權化として崇拜してゐる楠公が斯く罵られてはちつとして聞き流しにすることは出来ない。廁から飛び出して酒宴の席に上り、廁の中で使つてゐた團扇を縦横に揮つて前論を駁撃した。すると不思議や、異臭は逆つた。一坐は鼻をつまんだ。君平は熱し切つて居るから、そんな事には少しも氣が附かぬ。口角泡を飛ばして猶おのれの所思を吐くのであつた。とみる、杯となく、盤となく、器となく、皿となく、黄點々として異臭は更に甚しく漲つた。一座は鼻をつまんで立つた。君平は廁で使つてゐた團扇に糞のついてゐるのをそれと氣づかず、持ち來つ

て振り舞はしたのであつた。君平は下野宇都宮の人で、戦國の英傑蒲生氏郷の後裔である。幼少の時から穎悟人に絶してゐて、萬事束縛を受けることを好まず。一夜祖母の物語におのが家系を知り、慨然として家聲を興振せむことを期した。これから遊戯を廢し、節を折つて書を読み、劍を學び、家業を事としない。そしてその書を読むに當つても決して一字一句の末に拘はらず、忠孝大義に通じ、千古の英雄豪傑を欽慕して自らこれに比しようとするのであつた。壯年に及んで周ねく四方に遊んだけれども志、因より高く、決して自ら售らむことを求めず、滔々たる俗儒輩をば見下してこれと交りを持たない。いつも其友に向つて、『予にして大化・大寶の世に逢ひ、又天慶・天正の亂に逢うたところで、大織・淡海二公の相業と、秀郷・氏郷兩將の兵略とは皆な敢て企て及ぶ所ではない。けれども其位に在らずして其言を行ひ、古に稽へ、今に徴して王政の大典を明かにし、王化の萬一を助け、夷狄を攘ひ、盜賊を禁じて防備の兵制を立てることは出来るであらう。』というて居たが、果して今書一卷を著したのであつた。それにまた幕府の樓門・墳墓は壯美を極めて居るのに、歷代帝王の陵土は

空しく荒廢に歸してゐるのみか、往々にしてその御跡さへも定かならないのがあらせられるのを憤慨して自らその地を跋涉し實地に就いて一部の山陵志を著し、これを幕府に納れて修覆を圖らうと思ひ、さる役吏に依つてその著を上つたのに、役吏はいろ／＼と言ひ諭して傳達の勞をも執らず、これを還したので、君平は大に怒り、袂を投じて去つた。

或時京都に遊んで東寺を過り本堂に至るとそこに一つの衣冠嚴めしい木像がある。

「さては何人であるだらう。」と打ち案じて僧侶に問ふと、これを眞に足利尊氏の像であつた。聞くより君平怒髮天を衝いて大聲鞭を揚げ、その大罪を責めて鞭の碎けるのも知らなだが、寺僧等はその狂熱さに度膽を技かれてこれをさし止めることも出来なないのであつた。また或時土佐に遊んで順徳天皇の陵を拜し、雲慘愴として荒草煙に咽べる有様を目のあたりにし、慷慨の情に堪へず、蕭然、立ちつくして、『我が神州は皇統一系、萬古變るもので無い。何者の逆豎ぞ、彼れ北條義時。敢て至尊をして絶海窮天の地に置き奉るとは。而してその山陵の荒廢、今日の有様を致す、草莽の臣

子、これを拜して誰か憤慨の情を禁ずることが出来よう。」と痛嘆し、歸つておのが師鈴木石見に相談して何とか臣子の分を盡くさうと思ひ、直ちにこゝを去つたが、たま／＼霖雨のふとで或る川の水が漫々として漲り猛り、橋は落ちて復渡るべくもない。よつて君平は衣を解き、裸體のまま、で行人嗤笑の間を走り行いたのであつた。糞のついた團扇を振り舞はして楠公の精忠を論じた逸話と相俟つて君平が人と爲りを物語つてゐる。

また高山彦九郎の人と爲りを慕うて居たが彦九郎の北海に志して仙臺石の巻に到つたときこれに逢つて肝膽を吐かうとしたのに果たさない。でその歸りに林子平を訪うた。ところで君平は根が簡朴率直な人であつたから、一向に邊幅を修めない。孤劔一笠、衣舊び、袴破れて、一見まるで田舎漢の様であつたから、子平は見るよりこれを鄙しんで、『どの野翁ぢや。自分で自分の始末が出来ぬまゝに來つて人の憐れみを請ふのか。』と蔑んだから、君平も亦大に怒り、『何をほざくか、この鳥無里の蝙蝠め。』と大喝一聲、後をも見ずに去つてしまつたのであつた。

さる程に復た夷艦出沒して北海の波濤かでなかつたから、江戸にあつた君平は一日も心の安まる折とは無く、不緯五編を著して閻老に上り、邊防の事を議した。すると、幕府では『布衣の身を以てこの様な重大事を議するとは潜越の限りである。』というて君平を嚴法に處せむとした。けれども林大學頭が君平の人と爲りを知つてしきりにこれを諫めたので赦された。さりながら君平は爵々としてこれから樂しまない。自ら黙々齋と號してまた國事を論じない。力を著述に専らにして傍ら子弟を教授したが、文化十年、七月五日、四十六の壯齡を以て江戸の寓居に没したのであつた。その墓は谷中龍興山臨江寺の域内にある。墓表は實に水戸の藤田一正の筆に成つてゐるが、讀んでその結句の『吁今や斯人亡し。誰と與にか歸せむ。』とあるのに至ると、流石、この二傑人の間には何ものかの相通するあるを覺えしめる。

林子平

『親も無し妻無し子無し板木無し金も無けれど死にたくも無し。』とは林子平が辭世の

和歌である。事新らしくいふまでも無く子平は高山彦九郎・蒲生君平の二人とともに寛政の三奇人とまでいはれた人である。子平は名を友直というて江戸の人であつたが譯があつて仙臺侯の祿を食むこととなつたのである。年十二三の頃には早くも略々書史を涉獵してその舉動はまるで成人の様であつた。そして常に地圖を展べてこれに臨み、邦土の廣狭から、山川の脈絡から一々これを暗記して洩らす所が無かつた。その讀書もまた章句の末に拘々としないうで専ら經世濟民のことに心を注いだ。幼時から大望を抱いてゐたので本藩には仕へず、二十歳ばかりの時に着のみ着のまゝで生郷を辭し、こゝにさすらひの身となつたが、生れつき寡慾であつさりしてゐて如何様は貧窮の間に處してもびくともせず、大義の爲に身を碎かむことをのみ心がけてゐた。その親戚の間には門閥・豪家が多かつたけれども、子平は左様のものをば眼中に置かず、『細事に嵬して安全を貪るときは堂々たる男兒の耻づるところである。丈夫兒はよろしく國家の爲に盡くすべきである。』と豪語してゐた。さて子平の最も心を用ゐるところは海防の策にあつたが、邊海漸く多事ならむとするのを見て、『今や、我が國昇

平の日久しく、士風懦弱に流れ、上下安逸に傾いて、あたかも夢中の人の様である。もとより外國の何物たるをば知らないのに、頭からこれを禽獸視して共に齒するに足らぬものとしてゐる。けれども何ぞ知らむや、彼れ等は百技精練、兵器整備し、陸に大砲あり、海に鐵艦あり。若し一たび事變が起つたならば、帝國のことまた如何ともすることが出来ないであらう。』と慷慨し、自ら天下の憂に先つて憂ひ、西は長崎に到り、北は蝦夷の地を極めて遍ねく天下の士氣を鼓舞し、皇國の基礎を確立することをその天職としてまた餘念とでもなかつた。此頃同藩に工藤孫卿といふ慷慨家があつたが、此人も矢張り子平と同意見の人でよく相會しては時事談に慷慨悲憤の涙を揮ふのであつた。かくて子平は復たび長崎に遊ぶと、たま／＼外艦がこゝに來船してゐたので、子平は直接外人に會つて詳しく海外諸國の事情を研べ、西洋諸國が日に國境を開き、野心を東洋全土の上へ逞しうしてゐることを知り、益々邊防の急がせにしてはならぬことを心配し、早速、江戸に還つて海國兵談や、三國通覽などの諸書を著して滿腔憂國の至誠をこれに濺いだ。ところで海國兵談の大意は、『西洋の諸國は土地を奪

ひ、領土を拓くを以てその務めとしてゐるのである。加ふるにその威力は日に強く、また航海の術に長じてゐる。然るに我が日本國たる、周圍はみな海で、江戸日本橋から歐羅巴洲に至るまでその間は一水路で何の阻隔ともあることが無い。彼にして一旦來らうとすると、直に來ることが出来るのである。今に於てこれが備をなさなければ邦家の前途、誠に計り知るべからざるものがある。」といふのであつた。そしてまた三國通覽の主旨は、『日本が一旦朝鮮・琉球・蝦夷の三國と干才を動かす場合でもあつたならば、此書によつて應變をなさせよう。』とするのにあつたのである。さてこの二書は出來上つたけれども、海内の人で心に外寇の何たるを知つてゐるものは無い。徒らに無稽の事實を構へて世を惑すものとなし、板を毀つて子平を仙臺に護送し、その兄嘉膳の家に禁錮させた。

これより以前、子平がまだ京都に居る時であつた。ある人が高山彦九郎の人と爲り語り、慷慨義憤、談一たび國事に及べば熱淚滂沱としてその双頬を傳はるのを盛に稱揚した。と子平は、『彼にはたゞ泣癖があるのみで御座る。今の時勢はたゞ泣癖ある

のみの人物を要する場合には御座らぬ。方今の世、憂ふべきものは外寇の一事あるのみにて御座る。若し一旦外寇の來るものが有つたならば、何を以てこれを防がうとするのであるか。萬一を神風に待たむとするのであらうか。』というた。子平はかくの如くに眷々世を憂ひて未だ嘗てしばらくの間も天下の事を忘れなだが、その非常に磊落不羈な性格を忍ぶべき一逸話がある。兄嘉膳の妻が死んだのは丁度木枯荒ぶ嚴冬の候で寒氣劔の如くに人の肌を刺す時であつたが、夜更けて一家の人々が寢に就かうとしても子平は見えない。さては如何したことかと嘉膳は默然として立ちあぐむと屍の衾の中から軀の聲が洩れて來る。よつて嘉膳がそこへ行いて見ると、子平はその衾の中に死した嫂と枕を並べて眠つて居るのであつた。嘉膳は流石に打驚いて子平を叱り起すと、子平は少しも周章せず、悠々として床から起き出し、『何せ、寒さが酷いのでちよつと嫂上の衾を借りたまで、御座る。嫂上はもうなくなつてゐるのに何も妬かれぬとよろしいでは御座らぬか。』というて、兄弟相視て哄笑したのであつた。けれども一旦禁錮の身となつてからは、居睡りをするではなし、欠伸をするではなし、

謹慎端坐、日を重ね、年を閲して終始一日の如くであつた。と程なく病に罹つた。在
 萬久しきに亘つて癒えない。と嘉膳は大層この事を心配し、友人をして子平に言はし
 めた。「そなたは今しも罪の身に置かれてゐるけれども、そなたの心は俯仰して少しも
 天地に愧る所が無い。他日必ず青天白日の身となるであらう程に、少くは逍遙自適
 してそなたの身體を大事にせられたい。官でも決して咎めはしないのである。然らず
 して一旦不幸の事があつたならば、解救に遇うても間に合はぬこととなるであらう。
 さうなつたならば、兄上等が遺恨は言語に盡くさるべくもない。」と子平はこれを辭つ
 ていうた。「成程、拙者は身を大事にすることを知らぬ譯では御座らぬが、貴殿の言は
 れる様にしたならば、是れは取りも直さず、上を詐くと申すものにて御座る。假令、
 他に知る者は無いとしたところで、獨り天を如何しようや。」かくて病は益々重り行い
 て禁錮のまゝに四十餘年の娑婆を辭したのであつた。ところで太平久しきに及んで別
 段心を外國の事に傾ける人としては無かつたから、子平の罪されたのを當然のことと思
 つて、誰れとて子平の爲に冤を雪がうとする者とても無かつた。然るに獨り男兒蒲生

君平があつた。嘗て子平を叩いて、「此の田舎漢奴、何しに來たか。」と罵られて、「鳥無
 き里の蝠蝙蝠」と譏り返した蒲生君平があつた。君平は子平の亡くなつたのを聞くと
 直ぐに書を上つて子平の爲に墳墓を收めむことを請うたのであつた。男兒の男兒た
 る尊さは實にこゝにあるのであつた。しかるに官では仲々に其願ひを許さなんだが、
 此の後屢々外夷の患ひがあつて子平の豫言は一々適中したので始めて墓を立てること
 を許された。仙臺市街の西、龍雲院の域内、石の表に六無友齋直之墓とあるもの、即
 ちこれ子平の墓である。雨打風淋幾百幾十年、蘇苔碑を埋めてしかもその名をば埋
 め得ない。

藤田東湖

幕末の代は亂れた。尊王論者と佐幕論者とは相搏ち、攘夷論者と開港論者とは相屠
 つた。此時に當つて尊王論者が泰山と仰ぎ、攘夷論者が北斗と崇めたのは實に水戸の
 徳川齊昭であつたが、氣魄雄大、智慮聰明、盤錯に遇うて挫けず、紛擾に處して亂れ

す、銳意、齋昭を扶けて水戸をしてかくまでに重からしめたのは、藤田東湖の力に俟つものが頗る多い。

東湖は字を斌卿といひ、通稱を虎之助と呼んだ。その父の幽谷は始めて水戸藩に事へ、彰考館の總裁に任せられて二百石の祿を食んだが、東湖は生れ落ちるとから流石に凡俗輩とはその群を異にしてゐたので、人々は「藤田家には續いて偉い人物が出来た。」と言ひ合つた。文政年間、年十四歳の時に幽谷は役を帯びて江戸にゐたから東湖はその友豊田天功と水戸を出て江戸に到り、父の寓居を訪ね、龜田鵬齋・太田錦城等の儒者を問ひ、また岡田十松の門に就いて擊劔を學んだが、東湖は専ら力を武技にのみ濺ぎ、伯父に願うて母方の叔父の原雅言の處に寄寓し寒風凍雪の中に心神を練磨した。さる程に父はまた江戸の邸に入つたから、東湖は「私が曩に郷里の先生に學んで免許を得ました十字の槍の法なるものは要するに華法でござりまして實用に逆しませぬ。よつてこれから實用に適したものを學びたい御座ります。」というて父の許しを得、伊能一雲齋に從つて槍術を學んだ。さて幽谷は事を竣つて歸らうとするに臨み、

東湖を戒めて、「文武の兩道は鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如きものであつて、兩々相俟つて始めて用を爲すのである。かたよつてはならぬ。お前は決して腐儒となつてはならぬ。また所謂劔客となつてもならぬ。」というたので、東湖は益々奮激した。これより先、英吉利の軍艦が常陸の北邊なる大津村に來たことがあつた。村人は打驚いて急を告げた。世間の人々はみな幕府では定めて舊典によつてこれに接するだらうと思つて居たのに、さて幕府からの吏員は漂泊者の例を以てこれを寛待した。幽谷はこのことを聞いて痛憤の情に堪へず、東湖を呼んで、「近年、夷狄の徒が頻りに我が邊海を窺うて傲慢無禮の程言語に絶してゐる。而も舉世姑息たゞ事無からむことを期してゐるのである。今般の事とても多分幕府では無事に夷人を放還しようとしてゐるのであらう。堂々たる神州一人の具眼者無きに似て千載の痛恨事である。お前はこれから直に大津に赴いてその動止を窺ひ、幕府の方で夷人を放還しようとしたならば、お前は早速彼等を壓殺しにし、從容官に就いて罪を請へよ。これは實に一時の策に出でるものだが、幾何なりとも神州正氣の爲、氣を吐くに足りるものがあるであらう。予に

はた、お前といふ一人の男兒があるのみで、お前にして死んだならば、家の祀は絶えるのであつて、同時に予と汝との命が盡きるときである。而も事は皇國正氣の振興に關する。一家の浮沈は顧みるに足りない。』といふと、東湖は慨然として、『承知致しました。謹んで御言葉に従ひ奉るで御座りませう。』と申す。幽谷は、『それでこそ我が兒ぢや。』と喜び、更に勵ましてその程に上らせることとした。たま／＼伯父の丹就道が來たので幽谷は酒を命じ、一同こゝに酌み交はして餞別の意を寓したのであつたが杯の数は未だ重ならないのに、飛報は突として、『幕府の役吏は薪水を夷狄に供して去らしめた。』と傳へたので、一坐はたゞ愕然たるばかりであつた。東湖、時に年十九、死を以て事に當るの概を見るべきである。また此の年のことである。伯父の某といふものが病に罹つて危篤だといふ報に接したので、東湖は水戸に歸つたが、三四日はかり經つて某は世を去つた。すると幽谷は江戸から一書を東湖の許に飛ばして、『文武を研究するのには、其時機を失すれば悔ゆとも及ぶまい。早く歸れ。』とあつたので、東湖はまた江戸に入つた。しかも人事は誠に夢の様である。江戸に入つて未だ數日ならぬ

に、新たに水戸へ歸つた其父幽谷が篤疾の報は、今しも教堂にあつて槍を弄してゐた東湖の胸を衝いた。即坐に槍を投じて晝夜兼行水戸に歸ると、幽谷は既に斯世の者で無かつた。東湖は慟して哭し、哭して絶せむとするばかりであつた。『前日の誨へは未だ耳に附いてゐるのに、今日早くも遺訓となつたのであるか。』というて悲慟五旬、食は咽を下らす。慘悴枯槁してまた斯世の人とは思はれなう。さて喪を訖つてから更に仕途に就き、父の祿二百石を襲うて進物番に補せられ、彰考館の館職にも補せられたが、東湖は事を以てその要職にあることを欲しない。同職大竹親從に書を與へて館局大弊の五事を論じ、斷然その職を去らうとまでしたものの、たま／＼藩侯が薨じたので果すことが出来なう。一體、藩侯が大患に陥ると水戸藩の内には清水侯を後繼者に仰がうとする議論が大分露しかつたので、儒臣の青山延子は江戸に在つて心痛一方ならず、家老の榊原淡路に會ひ、大義を以てこれを責めたが、淡路はせゝら笑つて、『均しく東照公の血統であらせられるのに、幕府の公子が水戸の統を繼がれたところで何の不可もないではないか。』というて更に意に介しない様子であつた。そ

して、『また郎中の策士連は日夜水野老中の第に出入してゐるから、事情は一向に測り知られない。山野邊兵庫が居たならば有司の姦謀を看破するには何でもない次第であるのだが。』と語を續けるのであつた。折りから東湖の出府を催促する書面は江戸から飛んだ。よつて東湖は杉山忠亮・山野邊兵庫等と急遽江戸に赴くことを議ち、自ら篋竹を執つて事の吉凶を卜すると凶の兆を得た。東湖は策を投じ慨然として、『吉を見て行き、不吉を見て留るはこれ尋常人の事である。臣子、國家の急に赴くに際して卜筮の吉凶を問はうや。』というて父の靈を祭り、『藩侯が病の平癒を靜神社に祈のである。』といひ觸らして同志の川瀬教徳・會澤安・吉成信貞・武田勝・鈴木宜尊等と江戸に入ることなつた。ところで、水戸藩の法として藩士たるものが藩の許可を経ないで國を出ると、その罰則に當てられるのが常であつたが、今や左様の事を危ぶんでゐるべき場合ではない。教徳は慷慨して『吾輩幸に死なずに境を出て罪を蒙る様になつたらば、國家の慶幸、これより大なるものは無いでは御座らぬか。』といへば、面々は勇み喜んで夜陰に乘じ、匹馬肅々として江戸に入つたのであつた。かくて東湖は同志の

人々と共に守山侯林大學頭を叩き、涙を揮つて侯が宗家の興廢を慮り、敬三郎殿(齊昭)を世子に定められむことを請うた上で、或は劍客を問ひ、或は監督を訪うて國禁を犯して南上したことを述べた。さる程に藩侯はなくなつたが東湖等の心勞は空しくならず、『朶雲片々』といふ遺書が出るに及んで其第一項には敬三郎の嗣立を指定し、又分に過ぎた諡や殊更に手厚い葬禮を營むことが禁じてあつたので、人々の喜びは譬ふるに物無く、元老中山備中守が幕府に申請して敬三郎の襲封を許されるに至つた。東湖等の喜びは想像の外である。文政十二年十月二、に所期を貫徹して水戸に歸つた。さて愈々齊昭が國事を執るに及んでは東湖を信任すること頗る厚く、郡奉行に任じ、屢々東湖を呼んで大事を議した。士は己れを知る者の爲に死す。東湖またその知遇の恩に報いむとして君臣一致、ひたすら修文奮武の事を勤しんだので藩の美風は一時に揚がり、人々領を延いて中興の化を望まぬものとは無かつた。しかるに一方門閥を負ひ、祖先を誇つてゐる舊弊派の人々は東湖等人材の士が明君の知を得て城中に翼を張つてゐるのを喜ばない。讒間交々これに入り、所謂朋黨の争ひは日を重ねて激しく

成り行いたが、齊昭が東湖を信任することは益々厚く、東湖を通事として江戸に徙らせ小石川の藩邸に居らせた。而して邊疆の驚聞は天を蹴る荒濤の響きにつれて我が大八州を震蕩させむとした。東西の志士みな雙龍を撫して天涯を望んだけれども、水戸藩は頻年國用多端相繼いで財政今や窮乏の状にあつたので、齊昭は蝦夷を開拓して北防の警に備へようと思ひ、東湖と相議つて大に藩士の元氣を鼓舞した。引き續いて東湖は史館徧修に充てられ、猶側用人に擧げられたが、喬木風多く讒誣四出した。よつて東湖は満室の蒼蠅掃へども去り難いのを慨いてまた職を辭せむことを願うたのに、齊昭は手づから筆を執り、『身は卿を信じて居るのに、卿は何故に身を信じて居ることが出来ぬか。卿にして去るならば、身もまた仕を致すであらう。』と認めて東湖を諭した。この藩侯の温情に接して血誠あるの士誰かまた涙無きを得ようか。東湖は死を期して事に當つた。此時の事である、家老は齊昭の命を傳へて黄金を東湖に賜うた。すると東湖は黙つてそれを受け、直に奥右筆局に入つて黄金をその局長に托し、『拙者は元から貧窮の身では御座れど、今故なくしてこれを御受けすべき次第としては御座らぬ。

貴殿から何卒家老に傳へられたう御座る。拙者はよしや餓死したとろで此の様な賜ものをば拜する譯には參らぬので御座る。』といふと、局長は黙して答へず、家老もまたこれを強ひることが出来ないのであつた。さる程に幕府では攘夷の令を廢して寛政・文化の令を守るべきことを海内の諸侯に命令した。『あゝ、我が公他年の志は一朝にして廢した。天は猶未だ醜虜を驅除するを欲しないか。』というて東湖は潜然として泣いた。既にして剛直清廉の聞え高かつた今井惟典は急に寺社奉行にされたので、東湖は執政府に詣つてこれが爲に辨ずるところがあつたが、更に齊昭に見えて左右の人々を屏けられむことを請うた。齊昭は早くもそれと察して、『卿の來たのは多分今井の事に關してであらうが、事情はもはや決定して了つたのである。彼れ此れ言うたところで仕方がない。』といふ。東湖は畏まつて、『惟典に命じなされましたならば既に決したと仰せられませうが、未だ命じられませぬ以上は、決したとは申されませぬ。たゞ君侯の御處分如何に在るのでは御座りませぬか。』『身は昨年衆言をおしのけて今井を不次に撰んだのであつたが、今井は如何も人の言を容れぬとの由ぢや。しかも身は

今井を保護して今日に至つたものゝ、既に今井が人望を失うた以上は致し方が無い。茲に閣外へ出して敬神排佛の事に従はせるのもまた策の得たことではないか。』惟典は直情徑行、執政もこれを憚り、監察もこれを畏れ、佞人はとり分けてこれを忌んで居ります。君侯、彼を拔擢なされて未だ久しからぬに彼を貶されましたならば、小人共は手を拍つてこれを慶ぶで御座りませう。』とに角、去つて執政と論ずるがよろしいであらう。こゝに東湖に涙を流して退き、執政新城寅壽に會つてこれを詰ると寅壽はたゞ顔を赧うして答へない。よつて東湖は家に歸り、平生言はうとしてゐて未だに言はなんだところのことを上書して申し開き、病によせて門を杜ち、姻戚の武田伯道に頼んで職を辭したい趣きを請はせた。ところで幾日ならぬに今井惟典は東湖の家に来り藩命を傳へてその役に出でむことを促し、そして、『拙者は參政を罷めても猶ほ銳意事を視て居るのに、貴殿には何とてかく逡巡されるので御座るか。』と問うた。すると東湖は、『貴殿が出で、事に當られるのは、さながら拙者が退いて病を養うてゐると同様に御座る。』と答へたので、惟典は一笑して去つた。島村志摩が使に立つて

藩命は再び至つた。東湖は、『臣にして一旦病が癒えましたならば公命の忝きを拜さぬまでも出でて事に當るにて御座りませう。なれども臣の病は仲々輕症にては御座らぬ模様にて御座ります。』というてこれを拜謝した。しかるに安島彌太郎が使に立つて藩命は三たび至つた。『先日、汝の奏議は深く予の心を動かし。さるを汝が病であるというて家に籠つて居たならば、いろ／＼とあらぬ噂が起つて人の心も安まらぬ。實に痛心の極みである。何卒、予の爲に暫くなりと出て呉れよ。』とあつたのである。『君侯の臣を遇せられること、これ程までに手厚うわたらせられるのか。こゝに至つて猶且つ前議を固執するのは不忠不敬の極みで御座る。』と東湖は君恩の厚いのに泣いて命を奉じ、これからまた出でて力を藩侯の爲に盡くした。初め、齊昭が藩に還ると直ぐに鐵砲を鑄たり、練兵を行つたりしたから、幕府では齊昭に異志あることを疑つて居たが、いよ／＼こゝに參府の命は下つた。時しも東湖は病の床に沈吟してゐて多くの醫者達もその行を止めたけれども、東湖は、『吾輩、死をだに且つ避けない。況んや區々たる病症などは毫も意に介するに足りない。』というて母や妻子に訣れを

つげ、卯月半ばの朝風に送られ、意氣慨然として江戸に入つた。『さて藩侯齊昭には必ず幕府からの嚴誼を蒙られるであらう。』と人々言ひあうて憂ひの雲は邸内に漲つた。と東湖は、『事が表沙汰になつて了つては如何ともすることか出来ない。今の内に哀訴するがよろしいで御座らう。ところで拙者は今しも非常な大患で、命は明日の朝をも待たぬやら分らぬ。願くは一命を賭して君侯の爲に哀訴するで御座らう。』と決心し、猶自ら腹を屠つて齊昭を救はうとしたのに、折りから齊昭は東湖を呼んで繰返し論すところがあつたので東湖は自殺を思ひ留まつた。しかるに雷電一撃して齊昭謹慎の命は幕府から至り、世子の慶篤に命じて所領を襲がせることとなつた。齊昭は東湖を呼んで、『身はよく汝の心事を知つてゐる。よつて汝にも役を罷めて貰ひたい積りもや。』というた。『仰せにも及びませぬ。他人にありましては如何か存じませぬが、臣は決して罪を免るべくも思はれませぬ。よしや、免かれましたとて何の面目あつてか世に立つことを得ませう。役を罷めて長く君侯の御側に侍することを得ますならば、臣の本懐、これに過ぎましたものとは御座りませぬ。』と東湖は誠心こめて開

陳した。かくて東湖は職を奪はれて禁錮の身とはなつた。陰濕の氣は水の如くに漂ひ流れてしかも室内は蒸し暑く、裏板は低く、敷板は破れて汚臭の氣は鼻を衝いた。しかも氣を以て勝つた東湖はここでさしもの大患を忘れるに至つたのであつた。爪の間にも盛る塵垢は墨の如く、蚤虱は零れる程襟のあたりに徘徊した。滿腔忠憤の情、何處に向つてかこれを吐かう。感慨縦横、熱淚滂沱として正氣の歌は實に此の間に於て成つたのであつた。憂國の情、忠君の念、山を抜き、海を翻へす數百の文字となつて永く天地の間に存し、慷慨蠻賊を呑み、壯烈鬼神を泣かしめるものがある。後に小梅村の別荘に移されたか、たゞ終日兀然として壁に向つて坐してゐるのみで、讀むべきの書はなく、語るべきの友は無く、憂愁憤懣、泄らさうとして處がない。切齒瞋目、筆を劔にして回天詩史を著し、鶴勃牢騷、大節高義の爲に萬丈の氣を吐いた。猶は家學に基き、群籍を涉獵し、經綸一に詞章に表はれて讀む者感憤興起せざるはなく、東湖の名は天下を振蕩せしめたのであつた。さる程に齊昭は赦され、東湖もまた赦されて水戸に還つたが、全國その風を望んで來り訪ふ志士數ふるに違なく、人の時事を問ふ

者があるとして、慨嘆扼腕涙を揮つて詩史の二三篇を朗吟するを常とした。さて嘉永年間齊昭が幕府の命によつて海防の政を議するに及び、東湖を江戸に呼んで原の役に復らせたが、藩主の慶篤もまた東湖の誠心に感じて自ら誠之進といふ三字を大書して東湖に賜はつたから、これから通稱を誠之進と改めた。傑士佐之間象山等が來つて時事を相談したのはこの頃であつた。

しかも天は無情であつた。安政二年十二月二日に於ける江戸の大地震はこの英傑を拉して彼の世の人たらしめた。それとても一旦は運よく屋外へ出たのであつたが、その母が見えないので、家の内を覗き見ると、母は老の身の思ふに任せず、出で場所を失つてゐたから、東湖は駆け付け、母を負うて出ようとするとその束の間であつた、屋梁は破れ裂けて東湖母子を壓殺したのであつた。如何に英雄豪傑というても自然の暴威には敵することは出来なかつた。東湖はその時年五十一。齊昭の痛惜は一通りではなく、畏こくも九重の天を仰げば、東湖の死去を聞き召された時の聖天子には「あ、惜しい人物を失くした。」と嘆かれるのであつた。

佐久間象山

哲人の世に遭はぬことは由來久しいが、衆人眠れる間に獨り醒めて先見の明識、早くも千年の後を洞察し、ひたすら國事に奔走しても、妖雲迷濛、天日未だ明かならず、うたてくも刺客の刃に斃れた佐久間象山の一生は壯快にもまた慘痛の極みであつた。戸隠・淺間の山精・諏訪の水靈凝つて象山の一身となつたであらうか。「山紫水明の地は偉人を生ず。」の語、象山に於てこれを見るのである。

象山、幼にして穎脱、早くも凡々碌々の徒でないことを示したが、漸く長ずるに及んで豪邁不羈、慨然として經世の大業を以て己れの任とした。さる程に西洋各國の大艦、頻りに近海に出沒して開港を迫り、貿易を促して、或は巨砲を發し、或は人家を掠めた。よつて幕府では一方ならず、その處置に苦しみ、沿海の防備を嚴しくすべきことを申達した。松代藩主眞田幸貫は賢明大度の聞き高かつたが、深く象山の才を愛し、拔擢して近侍になさうとしたのに、象山は「學問が未だ成就しませぬから。」というて

これを辭したから、幸貫は遊學の資金を給して、象山が學の玉成を期せしめた。さて象山がいよく郷里を辭する場合になるとその母は村境にまで象山を送り、「お前が眞に學問を修めようと思ふならば、宜しく篤實にして道に志し、勤苦して徳に進むべきである。お前にしてこの母の訓へを守るならばお前が千里の外にあつてもさながら私の膝下にある様な心地がする。若し、お前の志業とお前の行爲とが凡々碌々何等斗屑の輩と異なる所が無いならば、如何様な美味珍味を以て私を扶持したところで少しの樂みでもない。お前にはよくこの邊のことを酌み分けてゐてくれよ。苟且にもこの言葉に背いたならば、お前は私の兒では無いぞよ」といふと象山俯伏泣血して去つたのであつた。見よ、偉人の母は必ず賢である。かくて象山は江戸に入ると、林述齋・佐藤一齋の二門に出入し、また梁川星巖・渡邊華山等と交りを結んだ。ところで今の時はこれ何の時であるか。「儒生學士がたゞ漢學漢文にのみ耽けつて他に讀むべきの書有るを知らない如き有様では邦家の前途は實に寒心に堪へない。今や外患存りに至らむとしてゐるのに、今日の書を讀む者はよろしく世界萬國の書を讀んでその精

を取り、以て我が國光を輝かすの策を取るべきである。」と發奮してこれからは只管西洋の書物を讀み、専ら外冠に當るの策を勉めたが、刻苦の結果、自ら銃を製した。意匠精妙、西洋人とても及ばないので人々舌を捲いて驚嘆しないものはなかつた。薩長・土肥諸藩が洋銃を模造したのはみな象山の製に倣うたのであつた。驪牛の子は駢うして且つ角があつた。山川はこれを告げてない。藩主が閣老となつて海防の事を董すに及び、象山は擧げられてその顧問に充てられた。よつて上書して海防の八策を論じ、「一、よろしく沿海の要害を扼し、砲臺を築き、大砲を置き、以て緩急の變に備ふべきにて御座ります。二、よろしく銅を和蘭に送ることを停めて數千門の大砲を鑄造すべきにて御座ります。三、よろしく洋制に模して堅艦を造り、江漕米に供すべきにて御座ります。四、よろしく人を選んで海連の事を掌らせ、互市を督して奸商を制すべきにて御座ります。五、よろしく水軍を練るべきにて御座ります。六、よろしく學校を興し、教化を布き、以て忠孝節義を督勵すべきにて御座ります。七、よろしく賞を信にし、罰を必し、兼ねて威惠を施し、以て庶民の心を收攬すべき

にて御座ります。八、よろしく貢擧法を創むべきにて御座ります。』というたけれども用ゐられなんだ。しかるに幾ばくならず、藩主は病の故を以て老中を辭したから象山亦郷に入つた。錦衣歸郷したので老いた母の喜びは一通りでない。疾を力めて出で迎へた。象山もた驚喜し、母の手を執つて膝に臥させたのであつた。既にして象山は母を奉じて復た江戸に入り、子弟を集めて教授したが、象山の風を慕うて四方より來り學ぶ者、日は一日よりも多かつた。これより先、象山は『荷蘭語彙』といふ書を著して世に公行させようとしたのに、幕府ではそのことを許さなから、快々として樂しまず、房相の間に遊んで沿海の實状を檢べ、また品川の砲臺をも見たが、その兒戯にも齊しい有様なのにけた、悲憤の涙を揮ふのみであつた。さて藩主の幸貫は卒したので、その世子は幸貫が遺愛にかゝる郡府樓の古瓦の硯を象山に賜はつた。象山感激、「先公には嘗て三村養寔と臣とを論じて「修理(象山)には瑕疵が多いけれども彼れ固より一豪傑である。」と仰せられた。臣はこれを聞いて感奮流涕「臣の榮たるこれに如くものは無い。」と思つて居たのであつたのに、先公今や此世の人ではおはさ

れぬか。臣、紛骨碎身して先公が鴻恩の萬一に報いむことを期しても能はぬは明かである。さりとて先公の明に背かぬことを期せねばならぬ。」と嗟嘆して、丈夫の涙ははら、と衣の袖にかゝるのであつた。

而して國の内外は漸く多事ならむとした。嘉永六年六月には米國八隻の軍艦、黒煙を吐いて相州の浦賀に入つたが、沿海の諸砲臺は果して用を爲さない。米國の使節は幕府に迫つて通商を促した。幕府は周章狼狽した。『軍艦やがては江戸城を衝かうとしてゐる。』といふ噂は江戸中に高く、また國中に擴まつた。象山は憂心忡々として禁ずるに由も無い。單騎鞭を擧げて浦賀に馳せ付け、その形勢を視察して江戸に歸り、委細を藩主に告げた。幕府では使を遣つて米使の安否を問はせた。しかるに米使は驕傲往々邦人を侮辱した。象山、これを聞いて憤懣充胸、切齒筆を揮つて十策を論じ、成るに及んでこれを幕府に獻じた。しかも猶幕府では一向に顧みない。獨り幕吏の川路聖謨は象山が先見の明あるを推稱して止まなんだ。折りから幕府では和蘭人に托んで軍艦を購ふことになつたが、象山はまた計を獻じて和蘭人に托むよりはこれを邦人

に命じて海上の操舟に慣れしむるがよろしいと論じた。しかるに幕府ではこの議をも省みない。門人吉田松陰は意を決して海外に赴かうと思ひ、晝夜兼行し、長崎に至ると、外艦は既に去つて波獨り平かであつたの、失望の餘り、また江戸に還つた。やがて安政元年になると米艦は横濱に來つた。幕府では急報に驚き、直ちに松代・小倉の二藩主に命じて警衛の任に當らせた。藩主の拔擢により象山は軍議に參與することゝなつた。象山感縦横、寝ねざること七晝夜、兵を提げて横濱に打ち臨んだが、時しも幕府では伊豆の下田港を開かうとしたのであつた。象山はこれを聞いて、『下田は天險の地である。碧眼の奴輩をして一日たりともこの要地に據らしむべきではない。寧ろ横濱港を開く可きである。』というて江戸に歸り、藤田東湖によつて水戸齊昭に建白し、また幕吏堀織部正等に説いて極力その不可なるを論じたから、下田開港のことはそのまゝになつた。この年六月、象山は松陰の事に坐して獄に繋かれた。省佩録は獄中義憤の血涙によつて草せられた大文字である。九月になり放還せられて松代に歸つたが、十二月になつて銅佛巨鐘を銘かし、大砲を鑄て海濱の防禦に充つべきの大詔

は九雷の上から下つたので、象山は天を仰いで朴舞踊躍した。これは象山が先主在世中にも痛論したことのある意見なので當時にあつては行はれなうだが、此論、今や闕らずも水戸を中心として天下に吹き起つたのであつた。『あゝ先公をして今日に在らしめたならば。』というて象山は感慨に沈んだのであつた。さて象山は松代に引き籠つて居たが、四方志有る者で敵兵の術をその門に請ふものが引きも切らないので幕府の疑ひがその身に及ばむことを懼れてこれを謝絶させようとする人があつた。すると象山は儼然襟を正しうし、『男兒の學はもと／＼國に報いむことを期して修めるのである。拙者は閉居の身ではあるが、國家隆替の係る所を冷やかに看過するは忍ぶ能はざるところである。一身の禍福、我に於て何か有らむやである。御心配には及び申さぬ。百年の後、當に拙者の心事は天下に明かになるであらう。』と答へて、その所思を曲げることとはせなうだ。猶是の歳の冬に幕府では林大學頭を京都に遣して事を聞え上げ、更に老中堀田某を遣して上申するところがあつた。翌年二月、象山はこの事を聞くと『是れ洵に天下の大事である。吾れ今禁錮の身にありとはいへ、苟くも氣息の尙存し

てゐるのに黙々として雲煙過眼視すべきではない。』というて禁を破り、血涙萬斛、門人馬場某といふものを京都に遣り、書を梁川星巖に與へて開港鎖港の利害得失を痛論した。星巖一讀、劔を撫して蹶起し、梅田雲濱・池内大學等と謀つてその書を九條關白に呈しようとした。然るに狂風一夜江戸城を吹いて安政の大獄は起り、門人吉田松陰は壯志を齎らして小塚原頭の露と消えた。象山痛惜の情は思ふべきのみである。『あゝ松陰若うして事業に急である。吾れ嘗て松陰を用ゐて偉業を成さうと思つて居たのに惜しいことをした。』というて潜然たるものこれを久しうした。

さる程に文久二年・象山は始めて宥され、こゝに自由の身とはなつたが、長、土二藩からの招聘をば辭し、その翌元治元年春三月將軍の召によつて遂に京都に入つた。時しも攘夷の論は燎原の焰となつて天下に猛り、四方燕趙悲歌の士、藩を脱して京都に雲合霧聚し、白、蕭々、刃を裏んで横行し、夷人を刺し、洋館を焼いて快とした。この間に立つて象山は獨り開港の説を主張したのであつた。荒濤叫ぶ大海の中に聳りて立つた巖にも似て雄々しとも雄々しい。象山は先將軍家茂と一橋慶喜とに謁した。

幕府では象山を陸軍局に屬け、浪華の砲臺のことを董させた。象山はこれを辭して、それには西洋人を雇はれむことを請うたが許されなんだ。會々島津齊彬もまた京都に在つてその臣高崎兵部に命じ、象山に就いて事務を問はしめたが、齊彬の説と象山の説とは全く符節を合せる如きものがあつたので、象山は大に喜び、鵬翼を張つて萬里の雲を衝かむことを期したのであつたのに、攘夷の論は益々盛んで齊彬は志を得ず、薩摩に歸らうとするに及び、また高崎兵部を遣して象山の奇禍を買ふに至らむことを諭させた。と象山は、『身分の貴賤は雲泥の相違がござりますすけれども、有り難い次第には其見る所が全く同一にて御座ります。知己を千載の後に俟つにも及びませぬ。拙者がこの論を抱くこと既に二十年に餘つて居ります。願くば堂々天下に發表して然る後に死に度いと存じて居ります。且つこれを史に徴しましても古より英傑の士が創業の秋に際して獨立の見地を持つた者は多くその身を殺して而もその志を成して居るので御座ります。死は固より期する所にて御座ります。拙者の頭は斷つべきも、拙者の志は奪ふべくも御座りませぬ。』というておのが心の程を打ち明け、死

を期して事に當つた。而して攘夷の論は益々旺んである。水戸藩の士人は續々京都に入つて攘夷の大詔を請ひ奉つた。象山はこれを聞いて大に愕き、上書してその利害を陳じ開かうと思ひ、訴狀を袂にして山階親王の邸に詣らうとしたその途中で街頭に閃めく刺客の刃にかゝつて斃れたのであつた。實に七月十一日、齡五十四歳であつた。この偉人を得て信州の山は益々高く、この傑士を得て信州の水は愈々長い。

吉田松陰

東京の西郊に遊ぶ者は世田ヶ谷の寒村、幾萬株の杉は槍の如くに並び、鬱々たる松の緑の間から朝日にはゆる櫻の花を點出してゐる中に、一つの祠が立てられてゐるのを見るであらう。是れ實に幕末の偉人吉田松陰の靈が長しなへに祀られてゐるところである。

松陰は名を矩方といひ、別に二十一回猛士とも號したが、生れながらの偉人の例に漏れず、幼時から穎敏ではやく老成の風があつた。年十一の時、藩公毛利慶親が松陰

を召して武教全書の講義をさせたのに、理義判明、言語爽快で少しの淀みもない。一藩目を側てた。長ずるに及んで古今の史書に通じ兵法に精しかつたが、常々松陰が偉大の器量を抱いてゐるのに望みをかけてゐた山田頼毅は『今やこの通りに世間多事の日であるから、たゞ和漢の學のみを勉めて貴重なる歲月を費すべきではない。宜しく活眼を開いて宇内の形勢を観るべきである。』というて松陰を勵ましたので、松陰も自ら大に省みてこれより専ら心を海外の事に用ゐる様になつた。嘉永三年、藩公に從つて江戸に行き、房總の海岸を巡視し慨然として『江戸の灣には浦賀の要衝があるが、兵備を此の處に嚴重にしたならば、碧眼奴の入寇亦た少しも恐れるに足りない。たゞ東北諸國の地方は土地は廣くて人少なく、警備もまた行き届いてゐず屢々夷人の覬ふところとなつてゐる。先づこれが地形を察して適當の策を講せねばならぬ。』と思ひ立つた。折りから肥後の宮部鼎藏もまた志を國事に抱いて東遊の意があつたので松陰は鼎藏と相約し、奥羽北越から佐渡に航し歳を踰えて歸つた。さて同じき六年、亞米利加の兵艦がその巨體を江戸灣に顯はしたので、海内一時に鼎の如く湧き立

つた。ところで藩侯はもとく松陰の器を重んじてゐたから、四方に遊學してその才を揮成させようとした。よつて松陰は江戸に入つて將及私書、急務常議、攘夷和議などの書を著して大に攘夷の論を高唱したが、佐久間象山が高邁の見識を懐いて現世を憂へてゐることを聞き、象山に會うて教を乞ふに及び意氣相投合してあたかも十年の知己の如く、象山また松陰が有爲の才を抱持してゐるのを愛し、『近世になつて西洋の學者は蒸氣力を假つて舟や車を動かし、鐵艦怒濤を衝いて日に百里の海を渡ることを得させてゐる。そして各國みな富み、各國みな強い。男兒よろしく海を渡つて萬里の外に遊び、列國の形勢を探つて、我が帝國の國運に資すべきである。』と勵ましたから、松陰は感憤奮躍、夢魂夜々未だ見ぬ歐洲の天に迷ふのであつた。あだかもよし此の年七月、露國の軍艦は長崎に來た。松陰は腕を扼して起つた。彼を知つて己れを知るのは兵家の第一義である。好機逸すべきではない。彼の國に航して異國の形勢を察すべきである。』袂を投じて長崎に至つた。象山は松陰の志を知り、詩を贈つて胸中の磊塊を吐いた。かくて松陰は長崎に着いた。着くと露艦は既に去つた後であつた。松陰の

失望は想ふべきである。よつてその途中に宮部鼎藏を訪ひ、復び江戸に遊んだ。さる程に安政元年正月、九隻の米艦は下田に來泊した。松陰が胸裏の甲兵は躍つた。『拙者は外夷の奴輩を欺いてその艦に打入り、彼を刺殺して國に報せむ。考にて御座る。おさらばで御座る。』というて鼎藏に別れを告げ、其友の金子重輔と共に出で立つた。時是れ文政元年三月二十七日、夜沈々として萬象は眠りに落ちた。金星、波に映じて、海浪の嘯やきは下田の岸邊に寂しかつた。松陰と重輔とは苦心慘愴、小舟を操つて波と戦ひ、風と闘つて辛く艦に達した。さりながら其佩刀と行李とはみなもとの舟においたまゝで、しかもその舟は空しく濤に翻弄されて漂蕩ふのであつた。艦中の人々はこの二人を扶けて艦に上らせたが、その中に日本語を解する人があつて、これに面接し、『兩國公議の前があるから如何とも致方がござらぬ。』というて短艇に載せて二人を送り還した。松陰は天を仰いで、『あゝ、天か、命か。』と悲憤の涙を揮ふのであつた。翌日、米人は書を飛ばして前夜の出來事を幕吏に報じた。去年雲外の鶴は今日籠中の鶏となつて松陰等は江戸傳馬町の牢獄に繋がれ、佐久間象山もまた嘗て松陰に贈

つた詩によつて嫌疑を蒙り、同じく獄囚の身となつた。そして松陰等はその藩に送られ、野山の獄に投せられた。かくて松陰はこの獄中に歳を閲して猶ほその家に禁錮せられてたが、間もなく赦されてまた雲外の鶴となつた。

同じき五年六月、藩侯は江戸から歸つて松陰の著述に係る「狂夫之言」を讀んで一方ならず感じ入り、命じてその思ふ所を上表させた。満腹の經綸を披瀝するの好機である。松陰は感激して大に力めた。時しも幕府では朝廷の命を僞り矯めて米國の使節と條約を結び、五港を開いて貿易を結ばうとしたので、勤王の志士みな怒髪天を衝き朝臣によつて討幕の議を上るに至つた。松陰また痛憤淋漓熱涙を墨にして「時勢論」一篇を草し、大原宰相の手を経てこれを上つた。しかるに老中の間部詮勝は幕府の命を帯び、志士を捕へるの任に當つたので、物情洶々、劍風牢騷として殺氣は天に懸かつた。松陰また大に憤り、間部詮勝を刺さうとしてその同志を糾合し、一七を懐にして東に登らうとした。ところで松陰の父常道は元來氣節の士であつたから、心にむしろこの事を快とし、松陰の此行を止めぬばかりか、密かに家老の益田親施に

この計畫を告げた。親施はさすがにその冒險的事業を危ぶんだ。そして未だ松陰の所思は果されないのに、十二月、朔風凜烈、松陰を獄に繋ぐの命は突として至つた。「罪があつて獄に下るは固よりその所であるけれども、今、罪名無くして獄に繋かれむとするはその意を得ぬところきある。吾輩は死すとも往くことは出来ない。」というて更に屈しない。吉良良明等八人の門生はこのことを聞くと、一時に松陰の門に馳せ至つて、大に幕吏の暴横を憤り、「先生、罪なきに獄囚の御身となられむとするは、私等の黙視するを得ないところで御座りまする。」というて幕吏の所に至り、その理由を問はうとしたのに、吏は一同病と稱して面接しない。良明等は激昂して、「さらば御床の邊に就いて事由を承りたうござる。」と申入れると、吏はみな懼れて身を匿し、翌朝になつて八人の者は幽囚の身にせられ、松陰はこゝに門生を教唆したからといふ名義の下に獄に下されることとなつたのであつた。幕命は至つた。しかるに時しも松陰の父常道は病の床にあつたから、松陰は委しく事の由を告げて、こゝ數日を父の看護に費し、その病が少しでも怠つてから獄に就きたいと乞ふと、幕吏も流石にその至誠

に動かされてこの請ひを請した。幾日ならぬに病は少しく怠つた。よつて松陰は門生を集め、宴を張つて訣れを告げた。師弟の眼は憂國の涙に輝いた。酒數行、慘として樂まない。とみる、父の常道は、『往け、丈夫兒の期するところは固千戴の上にある。よしや身を一時に屈したとて、芳を萬世に流したならば、復恨みるところは無い。』というて松陰を勵ました。かくて松陰は獄に就いた。面も憂國の焔は益々その胸中に燃えた。そして藩侯が江戸に參觀しようとするのを聞いて大にその非なるを論じた。さて六年の正月になると、播磨の人の大高又治と備中の人の平島竹次郎とが萩に來つたが、何やら要領を得ないで歸つたから、松陰は人を遣つてその意中を問はせると『三條・大原の二卿は、長州公の御東下を途にお待受けして大事を擧げようとなされて御座る。これ誠に以て我々の乗すべき場合に御座る。よつて我々は同志三十人の者共と公を伏見に迎へ、東奔西走、檄を四方に傳へて幕府討滅の擧に出でむ所存にて御座る。』といふ。松陰は掌を抵つて喜んだ。そこで門生に奨めて、『お前方はよろしく藩の籍を脱して大義の爲に一身を犠牲にし、以て我が藩の名を成すべきである。そし

て事が若し成つたならばその功勳は我が藩侯に歸し奉り、若し成らなんだならば斃れて後に止めよ。』と激勵した。しかも門生の徒は遲疑して仲々に決しない。松陰は浩嘆して、『あゝ我が長州藩士、また一人の骨有る者は無いか。士人として唯だ時勢のまに、其の向背を決し、藩侯を不義に陥るれても更に省みぬとは何事であるか。』というて數日に亘つて食をも取らなんだ。けれども燃ゆるが如き松陰の義心は終に門生をして慷慨奮起せしめずには止まなんだ。入江弘毅は弟の和作と共に身を以て此の任に當らむことを申し出でた。松陰は大に喜んで密計を授けた。しかるに事は未だ擧げられぬ先に計は漏れて弘毅兄弟は逮捕せられ、若狭の志士梅田雲濱・小林民部等もまた捕へられ松陰も續いて傳車東海に送られるに至つた。久阪通武・高杉晉作等の門下生は松陰を送つて別れを惜んだ。一道の電氣は相通じて師は首肯き、弟は奮つた。松陰は胸裏に焔の如き忠愛の念を懷いたまゝ、また牢獄の人となつた。仰いで天に訴へむとしても天は聴かず、俯して地に哭せむとしても地は顧みない、憂國の焔は松陰の身體を焼き盡くして正氣の歌はこゝになつたのであつた。感奮縦横、辭句勁烈、

天も爲に粟を雨らせ、鬼も爲に夜哭すであらう數百の文字は實に烈炎々として今も猶ほ天地の間に燃えてゐるのである。さて幕府では松陰を詰問した。『其方、嘗て匿名の書を作つて朝廷に献り、幕府を倒さうとし、猶ほ梅田雲濱と長州に會して密謀を企てたといふ話があるが、そは一體誠のことであるが。』松陰は泣然涙を垂れて答へた。『拙者に於て左様のことは一向に存じませぬ。猶ほ言を上るに際して匿名を以てするが如き卑劣千萬の次第は斷じて男子の所爲とも任せられませぬ。拙者が何とて左様のことを致しませうや。のみならず、梅田氏の我が藩に参りました當時拙者は罪に置かれて獄中に居りましたので、與に密議を企てるなどとは思ひもよらぬ次第にて御座ります。たゞ曩に著はしましたところの時勢論を大原參議に上り、また間部詮勝の暗殺を企てたのは事實にて御座ります。何卒、この二つの事件で罪に處せられたい。安政六年十月二十七日、雲動き草咽ぶ小塚原頭、氷刀風を研つて松陰が英魂毅魄は天に飛び、地に歸したのであつた。年三十。しかも明治維新大業の元勳は殆んどその門下から出たのであつた。』

『身はたと公武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂。』『親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ。』哀韻稷々として人の腸を斷つ松陰神社の祠前に額づいて心にこの遺詠を思ひ浮ると、英姿髣髴として眼前に在すを覺えるのである。

梅田雲濱

安政元年の九月、露西亞國の軍艦は大阪港に入り、書を捧げて我が幕府の高官に謁せむことを請うた。海内の人心は大に亂れた。京都・攝津の間には兵を招いて萬一に備へた。十津川の浪士等は若狭の人で京都の儒者であるところの梅田雲濱を招き、雲濱を謀主に仰いで露艦を襲はうとした。雲濱はその名を義質といひ、通稱を源次郎というたが、學問は博く、生れつきは豪爽で、夙に尊王攘夷の抱き、山崎闇齋の學を宗として諸家に通じてゐたところへ、更に江戸に出て藤森弘庵、佐久間象山、藤田東湖等に就いてますますその學を研ぎ、見聞を廣め、年三十餘になつて京都に子弟

を教授した。かくてその藩侯が召してもこれに應ぜず、西の方長門に遊んで高杉晋作久坂通武・僧月照等と交るに及んでは意氣相投じ、肝膽相照らし、尊王の論に、攘夷の議に口角泡を飛ばして談論風發したのであつた。さてその家はもと富裕であつたのに、雲濱は區々志を家事に用ゐなんだので、今や家運は衰亡に傾き、妻子屢々飢を訴へたが、雲濱は別にこれを意に介しない。『志が大きければ百物よく融り、心が小さければ百物必ず塞がるのちや。』というてゐた。かくて十津川浪士の熱望を納れ、慨然劍を把つてこれに赴かうとするに及んでも、その妻は病床に臥し、兒は饑ゑに叫ぶの窮境にあつたのを、一家の事を以て國家の事を廢すべきではないというて決然として家を出たのであつた。『妻は病床に臥し兒は飢に叫ぶ、單身宜しく戎夷を掃はむと欲す。今朝死別生別を兼ね、唯有り皇天后土を知る。』の一詩はあまねく志士の間で傳誦せられてその血を湧かせたのであつた。しかも至れば既に露艦は退去した後なので雲濱は痛憾涙を吞んで歸つた。しかも歸ればその妻は既に死んで居たのであつた。一家にはこの慘事が起つた。しかも眼を擧げて東海の天を望めば、雲濤萬里、狂瀾岸を

噛み英・米・佛三國の軍艦は武藏・相摸の海上に泛んで頻りに通商を請ひ、我が神州を蔑して舉動頗る暴慢であつた。攘夷の詔は降されるけれども、幕府では逡巡躊躇して決することが出来ない。雲濱これを見て痛憤禁せず、小林民部・梁川星巖・賴三樹三郎・僧月照等と竊かに詔を奉じて攘夷の事を擧げようとしてゐると、折から橋本左内・清川八郎等も亦江戸から來てその議論に賛成し、安島帶刀・日下部伊三次・藤森弘庵等は江戸にあつて遙かにこれが聲援をなすこととなつた。ところで水戸前中納言齊昭は義公光圀以來の祖訓を護つて尊王の念厚く、攘夷の見を懷いて居たが、雲濱は早くもこれに目を付けて、『今や、幕府は懦弱優柔で共に國家の大事を議るには足りない。よろしく水戸前中納言を推して元帥に仰ぎ、以て攘夷の詔を奉せしめるに若くものはない。』と發議した。星巖・三樹三郎等は手を抵つてこの議に賛した。よつて竊かに青蓮院栗田宮・左大臣近衛忠熙・右大臣鷹司輔熙・内大臣三條實萬・大納言中山忠能等を経てこの趣きを密奏した。すると幕府の大老井伊掃部頭直弼の命により幕府の密旨を齎して京都に上り、關白九條忠尙に通じ、甘言を以て攘夷の大御心を變せし

め奉らうと謀つた直弼の臣下なる長野主膳はこの雲濱等が奔走の次第を耳にして大に驚き、早速井伊直弼に報じ知らせた。直弼は直様主膳等に命じてその有志の徒を捕へしめようとして嚴重に其仲間を搜索した。さる程に幕府では繼嗣問題が起つて徳川慶恕・松平慶永・山内豊信・伊達宗城等は水戸齊昭の第七子に當る一橋慶喜を立て將軍の後繼者となして尊王攘夷の大義を尊べようと思ひ、橋本左内やH下部伊三次等を京都に遣つてこの趣意を奏上させることとした。よつて二人は小林民部を叩き、『今や醜虜その威を縦まゝにしてゐるのに、幕府の威權は地に墜ちてこれを制することが出来ぬ。しかるに一橋刑部卿は水戸黃門の子で夙に英敏明識の譽高く、尊攘の志を抱いて列侯士民の齊しく欽望するところでござる。よつてこゝに刑部卿を幕府の後繼者と定めて將軍を輔佐させたならば、必ずや大御心のある所を實行し奉つて世の變ふ所を知らしめるで御座らう。願くば與に俱にこの想ひを實現させる様に努力しようでは御座らぬか。』といふと、『拙者の思ふ所もまたそこに御座る。』というて民部も大に喜び、雲濱及び三樹三郎・星巖等と謀り、これが理想の貫徹に銳意した。朝廷では遂

に内旨を水戸齊昭に下し、慶喜を西城に納れ、猶ほ齊昭に命じ、慶喜を輔けて尊王攘夷の大旗を天下に掲げさせようとした。ところが直弼はこのことを聞くと、逃たゞしく紀伊から徳川家茂を納れて幕府の後繼者となした。『直弼何者ぞ、幼主を挾んで我意を逞しうしようとするのか。天の仇、國の讐である。素ツ首引き抜いてくれよう。』と天下の志士は齊しく憤慨した。

安政五年、櫻は笑ふ彌生の候、幕府の老中間部詮勝は井伊直弼の命を奉じ、京都に上つて陽に天機奉伺と唱へて金帛布匹を朝廷と諸公卿とに献じ、大に開國の利を説いて朝廷の議論を變更させむことを圖り、十月、町奉行の岡部前常等をして雲濱等三十餘人の志士を捕へさせたが、更に所司代酒井忠義に命じ、青蓮院宮及び近衛左大臣以下數人の公卿をも幽せしめた。かくて霜凍る十二月、雲濱は頼三樹三郎・梁川星巖等二十餘人の同志と共に江戸に檻送せられた。『君が代を思ふ心の一筋に吾が身ありとも思はざりけり。』檻中の口吟は丈夫兒の襟懷を語つて今に猶餘痛がある。しばらくして雲濱は小倉藩の牢獄に繋がれた。獄吏の訊問は至つて嚴しい。『其方共、常々攘夷を口

實として濫りに同志を糾合し、名を尊王にかこつけて縦まゝに幕府を倒さうと謀つてゐるのは、これ即ち凶險亂を好むといふものであつて、國家の大經を紊さむとする不逞の徒である。思ふに必らず、此が魁首となつて事を執つてゐる者があるであらう。包まずと申し開け。」と威しかつた。『拙者は生れてたゞ尊王攘夷の大義を知つてゐるのみで御座る。その他のことは断じて與り知らぬところで御座る。』雲濱は顔色陽々、春の如き態度で對へた。幕吏の拷問は言語に絶した。幾度か雲濱を鞭つた。幾度か圓木の上に座らせて膝の上に石を積ませた。爲に幾度か雲濱の氣息は殆んど絶ゆるに垂んとして、纒かに保つた。しかも決してこれが爲に言ふところを變へる様なことはせなんだ。獄吏の拷問は一層の苛酷を加へた。雲濱の肉は裂けて骨は碎けた。生きてゐる人とは思はれぬ程に憔悴して病の身となり、意氣は益々鋭くなつたが、秋風漸く冷やかに、同じき六年九月十四日、四十四歳を一期として獄中に逝いたのであつた。

平野國臣

徳川幕府の威信は今や殆んど地に委したけれども三百年來の積勢は未だ全く銷し盡くされたものではなかつた。しかも草莽の一布衣を以てして書を捧げて天皇の親征を奏請し、將軍の罪を問うて、『彼れにして命を奉じませぬならば、よろしくたゞ天討の一事あるのみにて御座ります。』と聞え上げ、堂々乎として討幕の議を献策したものは平野次郎國臣であつた。而して其議一たびは廟堂を動かして大和行幸の大詔は煥發せられ、國臣が精誠の進る所、尊王討幕の大風海内を吹き靡かさうとしたのに、うたてや、朝議中變して銀山の壯圖空しく蹶き、身は六角獄裏の露と消えたが、生氣凛々として永く滅せず、死して忠義の鬼と爲つて極天皇基を守つたものは、實に平野次郎國臣であつた。

國臣は福岡の藩士で藩の銃隊教師平野吉三の子である。生れて讀書を好み、國學に長じ、故實に通じてゐた。後に銃手番頭的小金丸彦六の家に養はれて雄助と稱したがたましく藩の用を帯んで江戸に行き、寛永寺や増上寺を過ぎつてその莊嚴が遙かに宮城の上に出て居るのを見、幕府の僭越を憤はつて涕泗は横さまに流れた、安政二年、

藩士の岡部威明に従つて長崎に至り、營を築いて邊防に備へる事業を董す役目を帯びて居たが、時しも英・佛二國の軍艦が長崎に入り、殊更にその威容を示して我が國を侮辱したのに、幕府ではその兵威に恐れて何等の雪辱手段にも出でななだから、國臣は憤慨に堪へず、これより益々幕府を倒して天皇の大權を恢復し奉らむことに銳意した。と父の吉三はこれが爲にその養家に迷惑をかけることを氣遣つて、生家に呼び寄せたが、同じき五年、攘夷の令が下ると國臣は雀躍して席を蹴り、名を都甲楯彦と變へて京都に入り、頼三樹三郎・梅田雲濱等の同志と堅く結んで將に乾坤一擲の壯舉を試みむとしてゐた。しかも時運は未だ會せず、三樹三郎・雲濱等は壯心空しく幕府の臣間部詮勝の爲に收め去られ、國臣の客舎もまた幕吏の圍む所となつたものゝ、時しも國臣は外出してゐてその事を聞いたから、そのまゝ福岡へと逃げ歸つた。幕吏は追跡した。時しも京都の清水寺の僧月照はまた憂世慨國の人で難を避けて福岡に居たが國臣は一たびこの僧と相會うて國事を談ずると、立ちに肝膽相照らしたので、與に君國に盡くすことを誓ひ、こゝに道士の紛裝をなし、自ら月照の弟子と稱し、名

を對岳院雲外と改め、薩摩に入つて、愛國の士西郷隆盛を頼つた。隆盛は至誠の人である。喜んで月照等を迎へたが、薩藩では幕府からの督促で隆盛が月照・國臣等と相交通することを禁じた。國臣は、『此の堂々たる大藩で、僅か一人の義人を容れる餘地が無いのか。』と荒灘の月に腕を撫して悲憤の涙を打ち揮ふのであつた。しかも幕府の偵察は益々急である。ところで至誠の人隆盛はむざむざと月照を數奇な運命の浪のまに任せるには忍びず、血を敵つて死を約したのであつた。時は維れ安政五年十一月十五日の夜、大空は拭つた様に晴れ渡つて、からろ槽ぎつゝ飛び行く雁の一行は皎々たる明月の前に繪の如く浮び、こゝ一帶渺々たる薩摩瀉の浪の上には幾條の金蛇が躍つた。『ではこれから一先日向に押し渡らう。』といふことで、國臣は月照・隆盛の二人と俱に舟を浮べた。月照と隆盛とは月を賞し、水を稱へて風流韻事に餘念もないと見られた。常柄敷島の道に心を寄せて居た國臣は譬へしもない今宵の月影を肴に下部の重助を相手として酒酌みかはして居たが、俄かにざんぶとばかり水音高く響くと共に、月照・隆盛二人の影はもはや見えす、浪一きは月影を碎いてうら淋しい泡沫は

未だ消えない。國臣は大に驚き、船頭を指圖して二人を援けさせたのに、月照は既に息絶えて冷え入り、隆盛はやうやく蘇生つた。かくて國臣は姓名を宮崎司と改めて再び事を圖らうとしたが、幕府では盛んに人を京師に縱つて勤王の志士を索したから、國臣は到底事の成るべくもあらぬことを憂ひ、長門から筑後の邊に往來して同志を求めた。こゝに薩藩の士堀忠左衛門といふ者も非常なる慷慨の人であつたが、國臣は一人たび忠左衛門と會うて國事を談ずるとその所見が頗る一致したので意を決してまたしも薩摩に入らうとした。しかるに關門が嚴重で入ることを得ず、やつと藩士高橋某の僕となつて入ることが出来た。「我が胸の燃る思ひにくらぶれば煙はうすし櫻島山」の歌は猛火天に冲する國士が胸中の熱情を傳へて、今も猶眼の前に火を噴くのである。そして同志の徒と相語らひ、轉じて熊本に勤王の師を募つたが、同じき八年にまた薩摩に赴き、表面には姓を偽つて堀忠左衛門に倚り、たま／＼島津久光が尊王攘夷の志を抱いてゐると聞いたので、著した所の『尊攘英斷錄』と『培覆論』とを呈した。久光は一讀して大いに喜び、時事を談じて日の暮れるのを忘れる程であつたが、『身は

明年の春になつたならば、上京して尊王攘夷の詔勅を奏請する考へである程に、其方は先づ京都に入つて、身の上のを待たれたい。」とあつたので、國臣は、「いよく時節が来たか。」と奮ひ起つて京都に上り、同志の小河一敏等とこれ待ち受けた。同志の徒來り集る者忽ちにして三百餘人に及んだ。國臣は慷慨淋漓、燃ゆるが如き熱火の情を筆に托して草した大論策を闕下に献じた。「草莽の微臣、國臣謹んで方今天下の形勢を案じまするに、幕府は統御の術を失ひまして、内憂外患は交々至り、鳳闕の危いこと累卵も雷なりませぬ。國臣等夙にこの事を憂ひまして、尊攘の大義を唱ふることこゝに幾星霜かに及んで居りまするのに、義徒寥々として天下また強援のあることが御座りませぬ、爲に遷延して未だ大事を擧げないので御座りまするが、今や幕府では妄りに暴威を逞しうし、聞く所によりますれば、近頃は或る國學者に命じて廢帝の舊典を案じて居りまする由にて御座りまする。何といふ亡狀にて御座りませう。爲に今や天は憤り、地は怒つて居るので御座りまする。而してまた天下の志士仁人は皆齊しく扼腕憤激、その罪を鳴らさうと致しまして意氣誠に九天を衝かむとするもの

があるので御座ります。今しも島津和泉・尊王攘夷の大義を懐いて浪華に居り、所在の義徒勇み躍つてその下に從うて居ります。誠に千載の一時、またと得難い好機にて御座ります。國臣、茲に謹んで三つの策を献じます程に、陛下には何卒これをお擇びなされたう御座ります。第一には、今しも島津和泉が浪華に居りますまゝに、宜しく速かに詔を下され、浪華城を抜き、彦根城を焼き、二條城を屠つて和泉が親ら一隊を率ゐて京都に入り、幕府の役史どもを掃ひ退け、粟田宮を幽囚より救ひ奉つて大御車を浪華城に奉じ、而して後、陛下には天下に號令をお出し遊ばされましたならば、大軍東に下つて函嶺を以て行在所となし奉り、堂々として幕府の罪を問ふこと、致すで御座りませう。そして幕府の方でおとなしく過を悔い罪を謝しましたならば、その官を褫ぎ、その祿を削つてこれを諸侯の班に列しさせ、若し王命に逆ひましたならば、大軍直ちに討幕のことに是れ從ふので御座りませう。これが最もの上策と存じます。第二には、和泉が伏見にまで至りますのを御待ちなされまし、た上で詔を以て和泉を召され、在都の幕吏共を一掃し、粟田宮の幽囚を解き、二條

城を抜いて天下に號令し、さて後に義徒を募つて浪華城を取り、陛下鳳輦をこれに廻らしなされて幕府の罪をお問ひなされることにて御座ります。これは中策にて御座ります。第三には、和泉が上京の日に方りまして陽明氏に會議し、幕吏を一掃し、粟田宮の幽囚を解き、二條城を抜いてこれに據り、皇威を張り、義兵を募つて浪華城を抜き、而して後に幕府の罪をお問ひなされることで御座ります。これは誠に下策にて御座ります。斷々乎としてこの中の一策をお採りなされましたならば、その御成功は火を賭るよりも明かにて御座ります。『最早、志士の眼中幕府は無いのである。折りから福岡侯の黒田齊博は幕府に詣るべく、國を發て播磨にまで至つたが國臣は馳せて藩侯に見え、大義を説いて義舉に出でられむことを勧めた。けれども思ひもかけぬことなので藩侯は大に驚き、急に病と稱して國に向つたのであつた。しかも國臣はこれが爲に筑紫の獄に投せられるに至つた。『ひとやのうちの日長さは、千歳の秋の心地せり、こゝはことなる神の世か、さらに命ものびぬべし。』『もとより獄に住ふ身の、わびしといふもおろかなり、悲しといふも餘りあり、樂しというてやみな

まし。』よみがへり消えかへりても盡くさばや七たび八たび大和魂。』牢にあつて忠君の念は益々切である。『囹圄消光』神武必勝論各三卷・『盡忠録』二卷・『大體辨』一卷は實に獄中に成つたのであつた。さる程に文久三年三月になつて赤心報國發起の者の故を以て赦された。そこで國臣は京都に入り、國體辨を著して孝明天皇が創立なされたところの學習院に奉ると、國臣は召されて學習院督長を命ぜられた。然るに此年七月、安積五郎・藤本伊之助・松本謙三郎・吉村寅太郎等は中山侍從忠光を擁して尊王討幕の義旗を大和に翻へした。よつて朝廷では國臣を遣つてこれを諭させようとしたのに、國臣はその途中で早くも幕府の兵と鋒を交へたと聞いたのでそのまゝにして引き還した。すると此頃幕府はまた少しく勢力を得て京都に集まつた義徒も漸く散じたから、國臣は姓名を佐々木將監と變じて但馬に走り、長門にあつた七卿の三條中納言實美等に勸めて中山侍從を助けさせようとしたのに、實美はこれを肯き入れない。獨り澤主水正守嘉は義に動かされ、身を以てこれが爲に一臂を假すことを諾つた。かくていよいよ義旗を生野の銀山に擧げてその夜急に代官の川上徳太郎が家に至つた。

しかるに徳太郎は公務の爲外出して、不在であつたから、留守居役の武井といふものが出で、面接した。國臣は儼然としていうた。『吾々は勅命を奉じて亂賊を征伐しようとする者であるが、固く長州・及び京都と氣脈を通じての事であれば、その援兵の來るまで、此の御館を借り受けたう御座る。』某は今更如何ともすることが出來ずにその館を貸した。そこで國臣は館と五十俵の米と千兩の金を借り、羽檄を四方に飛ばし兵を募つて遙かに中山侍從忠光に應じた。四方來り集まるもの忽ちにして三千人、また聊か爲すあるに足ると思はれたのであつたが、大和の忠臣が事一敗空しく地に塗れたとの報が至つたので、國臣が軍の士氣俄かに沮喪し、逃げ去る者も少くはない。國臣、切齒して事の成らぬを浩嘆し、宣嘉をして先づ遁れさせ、自からは奔つて潮來郡の網場村に至つた。出石・姫路・龍野・豊岡諸藩の兵は幕府の命を奉じて來り追うた。そして國臣は終に豊岡藩兵の爲に捕へられた。國臣に於て死するは易く、生きるは難い。耻を忍んで繩目の身となつたのは、一息猶ほ絶えねば飽くまでも君國の爲に盡くさうと思つた一片の義氣が然らしめたのであつた。いさぎよく消えはてもせず

露の命のこりいくの、身こそつらけれ。』とは捕はれの身となつて豊岡の藩邸に送られる途中生野の山麓を過ぎる折りの口吟であつた。山容昨の如く、自ら願みて國臣今如何の状ぞ、感慨思ふべきのみである。幾ばくならぬに、姫路の獄へ投せられたが、獄吏は國士を遇するの道を知らず、國臣をば強盜・殺人罪の徒と同視して醜穢の一室に投じた。『こも着てもむしろに寝ても大丈夫の大和魂なに穢るべき。』痛憤滿胸、切齒して唇は爲に破れむとした。後、間もなく京都に送られた。途中湊川にさしかつた。滿目の景象慘として、楠公の忠魂、泣いて國臣を迎へ、國臣を送るにも似た。『なき魂もあはれと思へ湊川清き流れの末渡る身は。』かくて身は京都に着いた。『いかならむ身の行末は知らねども今日はみやこにまづつきにけり。』そしてこゝに國臣は六角獄裡の人となつたのであつた。しかも尊王愛國の權化たる國臣が態度は飽くまでも雄々しく、あくまでも凛々しかつた。獄中にあつて意氣は昂々、常に北畠親房の神皇正統記を講じ、囚徒をして尊王の精神を養はしめむとしたのであつた。『自國論』は實にこの獄中に於ての作で、斃れて後も猶ほ止まざらむとする國臣が氣慨の結晶であつた。

さて元治元年二月十六日、幕府は命を傳へて中山忠光が徒の安積五郎・澁谷伊豫作等を處刑した。『なきたまのよそになゆきそ九重に八重に花咲く時もあらなむ。』國臣は牢獄にあつて歌を手向けた。同じ年の秋である。長州の士、眞木和泉、久坂義助の徒は京に入つて火を市街に放ち、幕府の兵と戦つて大にこれを惱ました。幕府では國臣等の後患を恐れ、七月二十二日を以て國臣を始めとして乾十郎・古藤秀親・横田友二郎以下の三十三人を處刑させた。國臣はその時年まだ三十七であつたが、平生憂國の餘り、瘦軀校閲として、骨聳え、肉脱し、鬚髪は雪の如く、さながら百歳の老翁かとはかり思はれてたゞ眼光炯々として人を射るのみであつた。いよく刑に就くに臨んでは従容として北に向ひ、拍手再拜して永別を朝廷に告げたのであつた。『みやや人あらしの庭のみみち葉はいづれ一葉も散らずやはある。』しかもその歿後四年を出でないのに、王政復古の鴻業は成つたのであつた。

明治維新の大業が成つた最後の原因は、大政奉還でもなければ、藩籍奉還でもなく、實に長州征伐である。そして此の際奇兵隊を率ゐ、戦争の衝に方つて、絶代の奇智奇策を振つたものは高杉晋作であつた。

晋作が吉田松陰の門に入つたのは、安政四年で、時に年十九であつて、久坂通武は當時既に松陰の門にあつたが、松陰は通武を稱揚して、『小年奇才、國士無双』といつて居た。しかるに、今や晋作が松陰に謁するに及んで松陰は、『通武に劣らぬ器である。』といつて一方ならず晋作を愛重したのであつた。

晋作は幼時から卓犖不羈で、言論壯快、流るゝが如く、氣象は豪邁に、好んで詩を賦し、俳句を作つたが、やゝ長じてからは、専ら心を兵書に潜めた。松下塾に入つた頃、晋作は才を恃んで敢て學問を勤めず、たゞ漫りに大言壯語して快として居たが、通武はこれと反對に沈着で學藝既に老成の風があつた。ところで松陰は通武を揚げ、晋作を抑へたから、晋作は反省して奮勵し、學業大に進んだ。よつてこれから松陰は事を議する毎に多く晋作を延いた。さて晋作は松陰の塾に遊ぶこと一年、安政五年、

江戸に出で聖堂に入つて學んだが、松陰の刑に就いたのは、その遊學中のことであつた。居ること二年、萬延元年、江戸を去つて國に歸つた。

さる程に文久元年の春、晋作は擢んでられて世子の近侍となつたが、此の冬、幕府では吏員を上海に航海させようとしたので、長州藩では晋作に命じてこれに隨行し、そして其形勢を偵知せしめようと思ひ、資金五百兩を賜うた。かくて晋作は長崎に至つた。幕府の吏員は明年の三月を以て纜を解かむと欲した。しかるに晋作は幕吏と豪遊して明春に及んだならば賜はつたところの五百兩は悉く此の地に擲つに至るであらうと思ひ、百兩を以て一つの家を買ひ、妓を贖うて閑居し、靜かに明年の春を待つた。そして明年上海に到り、八月藩に歸つて復命したが、此の冬、江戸に遊學して久坂通武・大和直和等と相謀り、將に御殿山の洋人が館を焼かうと企てたが、事未だ發しないのに露顯し、遁れて京都に奔つた、同じき三年の夏、國に歸つたが、藩主はその罪を問はない。けれども晋作は自ら惶懼して松下塾に閑居した。しかし、時勢は永くこの偉人をして閑居せしめるには餘りに多事であつた。六月、藩主が攘夷

の擧を圖り、不幸にして馬關の役、長軍利あらざるに及び、晋作は藩主の命によつてこれを赴き援けることとなつた。晋作は感奮した。『門地を恃めるの徒はみな碌々たる無爲の輩でとても軍國の大事に堪へ得可しとも思はれない。門閥の弊は先づ第一に改めねばならぬ。』とは、晋作が日頃の庶幾するところであつた。よつて晋作はこのことを藩主に上言し、貴賤を論せず、士民を問はず、強壯用に堪ふべきものは厚く祿を給して兵に用ゐた。有名な奇兵隊といふのは即ちこれで、今日の徴兵制を晋作は早くも維新以前に實行したのであつた。かくて晋作は自らこれが隊長となつてその兵を操縦したが、賞罰嚴明、號令肅正で、流石に王者の師といふべきものがあつた。猶ほ其冬には拔擢されて世子の奥番頭となつたが、晋作の胸には活動の焰が熾んに燃えて左様な職にじつとしては居られない。亡げて京都に至り、久坂通武等と勤王の論を高唱せむとしたが、通武は、『それはよろしいが、かくては貴殿の主職を如何する積りでござるか。』というて晋作を責めたから、晋作も大いに窘つてその藩に歸つた。歸ると藩では晋作を野山の獄に下した、時は維新元年春三月、天地正大の氣發して萬葉の櫻と

なるの候であつた。しかるに此の年八月になつて英・佛・米・蘭四個國の聯合艦隊十八隻は馬關に來寇した。藩主は晋作を獄中に起して赴き援けさせた。と晋作は綺服錦袴、高履を穿き、蛇目傘を手にし、數名の藝者を引き連れ、聲高らかに伊勢音頭を唱へつゝ悠々として陣營に入り、迫らず、騒かず、軍事を督したのであつた。

さる程にこの冬になつて黨議は藩内に起り、家老の益田右衛門・福原越後・國司信濃等は勤王を唱へて禁闕を犯すに至つた。その謀に關係の無い藩士連はこの事を以て國を誤るの暴舉であると非難し、三家老やまたその事に與かつた者を捕へて、或は禁錮し或は獄に下し、そして藩主毛利慶親父子をば寺院に幽した。十一月、大納言徳川慶勝は問罪の師を率ゐて至つた。長藩では嘗て攘夷の爲に築いたところの砲臺を毀ち岩を撤して、やがては三家老を斬り、また獄に下されてゐる者を刑し、その首を慶勝の軍門に致して罪を贖はうとした。しかも一片稜々たるの氣骨ある者に至つては今更その様な不始末を演じたたくも無い。藩論は鼎の如くに沸騰した。そして右様の手段を以て一時幕府の機嫌を取らうとしたものをば邪黨と罵るの論は一番の内に漲つた。邪

黨の人々は、大に怒り、自ら正論を以て任ずるの人々をば一切捕へて獄に下したが晋作もまたその中の一人となつた。けれども晋作の意氣はこれによつて屈する様のことはない。身を以て脱して奇兵隊に遇つた。隊の人々は懇ろに晋作を迎へ、猶こゝに留まつて隊を統べられたいことを請うたが、『俺には別に考へがあるから。』というて晋作はこれを承知せず、劔を抜いて地を研り、慨然として筑前に至つた。しかるに幾ばくならず、三家老刑殺の悲報は晋作の耳を衝いた。晋作は風に臨んで憤激の情に禁へず、邪黨を掃蕩して一藩の弊政を革めようと志し、濤を蹴り、山を跋んでまた馬關に還り、檄を傳へて四方に兵を募つた。奇兵隊の士でこゝ彼處に匿れてゐた者共は雲の如くに来り聚り、兵威は堂々として大いに振うた。かくて晋作は太田市之進や山縣狂介（有朋）等と謀り、馬關の藩廳を襲うて彈藥兵器を奪ひ、軍資を諸方の豪家に募り、兵を率ゐて先づ伊崎の役所を襲ひ、萩城に迫り、勢に乗じて山口に打ち入り、伊佐村の邪黨を屠らうとしたが人々は疑懼の念に驅られて容易に發しない。腰間の雙龍、何の用ゐるとろぞ。晋作の毗は裂けた。『國家の危難は既に旦夕に迫つた。常法に拘

々として猶豫するの時では無い。汝等にして往くことを欲せずとならば、予は一人これに赴くであらう。此時に際り、汝等、手を袖にして碌々としてあつたならば、終には空しく邪黨の刃に罹るであらう。』痛憤、席を蹴つて起てば、衆亦奮然として起つた。かくて慶應元年春正月六日、伊崎の役所を圍んでその將藏田豊後之助を逐うた。そして或は繪堂村に、或は川上・太田・長登の三個所に、或は長登川の上に、いつも邪黨を打破つた。すると萩城の邪黨は大に驚いて急を幕府に告げ、藩主を挾んで令を藩内に下し、衣食を奇兵隊に賣ることを固く禁じ、新たに三千の兵を差向けて奇兵隊を打たせた。晋作は百人の兵に前とし、一夜大風雨に乗じ襲うてその軍を破り、敵將栗谷隼人を斬つてその首を槍に掲げ、鼓譟して進んだ。邪黨また新たに兵を出して連戦三日に及び、しかも終に利あらず、退いて萩城を守つた。晋作等はこれを攻めようと思ふたが、毛利元周・毛利元純等の周旋で兩軍の間に講和は成立した。よつて晋作は邪黨の首謀者數人を殺し、其餘をば宥した。で晋作はまた山口に入り、井上聞多（馨）等と謀つて鴻城軍といふ兵隊を組み立て、邪黨の兵を佐々並所に襲うてこれを破り、

二月には終に邪黨を平げることが出来た。一藩の議論は始めてこゝに勤王に歸した。さて一方會津侯の松平容保と長州侯とは其間が久しく圓滑を缺いて居たが、容保は終に幕府に勤め、問罪の師を長州に差し向けられむことを請ひ、閣老の水野忠精もまた切りにこれを勤めたから、幕府では終に大監察の塚原伊馬守等を使として、「大膳父子はよろしく速かに幕府に詣つて罪を謝すべきである。然らずば大將軍親ら天下の大兵を率ゐ、兵馬國境を壓して至るであらう。」と謂はせた。尾州侯徳川慶勝はこれを諫め、幕臣勝安房もまたこれを諫めたのであつたがみな聽かず、四月、幕府では終に天下に令して長州再征の軍を起した。「毛利大膳父子、過を悔いず、遂に非常の計を企て、居る由ぢや。よつてこゝに詔を奉じ、五月十六日を以て大舉してこれを征せむ所存である。沿道の諸侯はよろしく東觀の期を緩めて命を俟つべきである。」かくて將軍は終に江戸を發した。品川に至る頃ほひ、二士あり、進み出て、「毛利氏の罪は既に罰せられましたのに、今またこれを討たれましたならば、これは實に無名の師にて御座ります。且つ今年は東照宮の二百五十回祭にも當つて居られます程に、何卒、

こればかりは御止めなされませ。」と諫めたが、將軍は聽かない。すると二士は腹を屠つて馬前に死した。幸先は早くも目出たうなかつたのである。

將軍は入朝して大阪に行いた。十一月になつて使を長州に遣して長州侯を召した。

そして「二十六日を経て到らなければ問罪の師を遣すであらう。」といひ遣つた。長州の藩士は藩侯を山口に奉じ、衆を會して相談に及んだ。衆論囂々として容易に決すべしとも見えない。晋作は聲を闐ましていうた。「幕府では曩に我が三家老の首を得て猶ほ満足せず、今又我を撃たうとするのである。何等の亡狀であらう。我等はたゞ死を以て國を守るべきである。幕府何ものだ。」辭氣激越、衆みな死を期してその議に同じ藩議は益々固い。

翌慶應二年五月一日、幕府では小笠原長行をして旨を傳へさせ、「汝の藩を處するに三つの事を以てする積りぢや。封十萬石を削るはその一である。慶親父子を終身の禁錮に處し、嫡孫興丸をしてその家を襲がしめるはその二である。三家老の家を絶つはその三である。」と申し達せしめた。長藩の激昂は益々甚しい。戦闘の決心は愈々堅

い。わざと返答の期を遅らせた。幕府では終に師を發した。長州を攻めた軍は凡て四軍であつて、その一軍は藝州からし、その二軍は石州からし、その三軍は豊前からし、その四軍は海軍で大島を砲撃したのであつた。長州方では太田市之進・石川小五郎等は藝州に向ひ、小瀬川に戦つて幕軍を破り、進んで四十八坂の險に據り、大霧に乗じて募兵を襲ひ、互に勝敗はあつたが、終には全くこれを打破つたのであつた。井上聞多・大村益次郎等は石州口に向ひ、迂路を取つて幕府軍の後方に出で討つてこれを破り、終に監軍の三枝刑部を殺した。濱田城主の松平武聰は城を棄てて雲州に去つた。三軍・四軍の方面は最も難局であつて、これに打ち當つたのは實に晋作であつた。六日、幕府軍は周防の大島郡を襲つて、戦は先づ開かれた。その報知が馬關に達すると、晋作は直様丙寅艦に乗り込み、十二日の夜進んで幕軍を大島に襲撃した。晋作は艦首に立ち、眼を瞑らし、叱咤して敵艦の間に闖入し、縦横馳突、回轉意の如く、實にや傍ら人無きが如くであつた。幕船は驚いて抗戦することも能きなんだが、晋作は追窮しないで馬關に歸つた。幕船、時は追はうとしたが、これは多分薩艦が來つて

長を扱ひ、幕府を誘ひ出さうとするのであらうと思ひ返して止めたのであつた。十六日、晋作は三艘の兵艦を率ゐて田の浦を砲撃した。砲臺の守將島村志津馬は善く防ぎ大砲を發して長州の一軍艦を覆した。すると晋作は大に怒り、四百の勇兵を小舟に載せ、岸に上つて突進させた。長船は海にあつてこれを助け、また小倉の將安志内記を擒にし、火を放つて民家を焼いた。小笠原の兵千餘人・幕兵百餘人、拒ぎ戦うて辰の刻から申の刻に及んだが、長軍は終に田の浦の營を焼き、糧器を奪うて退いた。つゞいて翌日、晋作は兵を進め、田の浦から門司の浦に至り、その砲臺を襲うて守將の小山左近を殺し、進んで大里浦の營を撃つた。守將小笠原長行は砲を發してこれを防いだ。晋作は三百人の艦兵を帥ゐ、丸を冒して大里に至り、山にのぼり、挟み撃つて終に長行を走らせた。幕府は陸上に戦ふことの非なるを知り、軍艦を發して小倉の近海に出沒させた。これ、長軍のみに苦むところであつたが、幸にも奇傑坂本龍馬が薩艦を率ゐて來り援うたから、晋作は龍馬に海の方面を托した。龍馬はよく指揮して幕艦を惱まし、長兵は爲に一層の勢を得た。八月一日、晋作は進んで小倉城を攻め

てこれを抜いた。城中の將小川彈正は自殺し、城主小笠原忠幹は奔つた。かく幕府は天下の兵を擁して四境から長州に迫つたけれど、長兵は各道みなよく防いで、常に幕兵を破つた。豊前の東端から安藝の兩端まで四十里間の軍事は晋作がこれを主宰し、機を制し、變に應じ、從容自若としてこの二國を泰山の安きに置いたのであつた。小倉を撃つた時には、晋作は烏帽子を戴き、直垂を着し、胡床に踞して將士を指揮し、威風凜然としてあたかも一大諸侯の如であつた。けれども足立山に戦つた時は戎服を着けず、浴衣のまゝで扇を手にして涼を取り、「何故、軍裝をなされませぬか。」といふ或人の間に對してたゞ、「弱兵を破るにはこれで十分である。」というて呵々大笑するのみであつた。小倉を攻める間晋作は馬關に居て、連日流飲、妓に戯れ、部下の士卒がいらだつて開戦を迫つても一向平氣である。小笠原の兵が遙かに對岸の門司大里から戰を挑んでもなほ應じない。部下は愈々激昂して、「今一應迫つてきかぬ場合には高杉を斥けよう。」とまで言ひ合ふ様になつても晋作は猶ほ平氣で酒を飲み、妓に戯れてゐたが、日暮れになると遽かに起つて進軍の令を發した。はやりにはやり、勇みに

勇んだ長兵は、寡を以て衆を壓し、立ろに奇捷を奏したのであつた。自分は石州口・藝州口の戦ひを詳記するに遑が無い。たゞ馬關方面の戦争を記すのみを以て足れりとしよう。この方面の總大將は高杉晋作であるけれども、客將となり、參謀となつて一臂の力を添へたものは實に坂本龍馬であつた。龍馬は薩長の間に奔走して二藩を聯合させた人であるが、また長の海軍の爲に重きをなさしめた人で決して單に口舌の雄たるのみには止まらなんだ。各方面の幕軍はみな敗れて、我が軍をもてあましたのに、八月二十日、將軍家茂は大阪城に病死し、ついで立つた十五代の將軍は流石水戸學の流れを汲んで勤王の志が厚かつたから、立つと直ぐに征長の軍をかへしたのであつた。要するに長州征伐は幕府の威勢を落し、勤王諸藩の氣焰を高めた外には何の得るところとても無かつたのである。さて幕軍が去つて長州の國難が解けると間もなく晋作は病に罹つた。その病は肺病だとも花柳病だとも傳へられてゐるが、この夏、難局面の總大將となつて三軍を叱咤した豪傑も、冬は忽ち一室に呻吟するの病夫とはなつたのであつた。よつて日頃好ん

だ酒をも断つたが、命数の盡きるのをば如何ともすることが出来ない。翌慶應三年四月四日、春秋僅かに二十九の身を以て新緑煙る間に歸らぬ旅の身となつたのであつた。あゝ、天はまさに長州の俗論黨を倒し、長州をして幕軍を破らしめるが爲にこの豪傑を降したのであつたらうか。短いその一生を通じて何といふ苦痛の魔神の醜弄するところのみ多かつたことであらうぞ。

晋作の遺骨は長州厚狹郡吉田村の當年奇兵隊が屯した處に葬られた。おく露鬚き奥津城の邊り、草の庵を結んで緑の黒髪をこそ削り落したけれども、明眸皓齒獨りその當時に變らぬ花の盛りの身を墨染の衣につゝみ、清行三十年、一日の如く香華を手向けて晋作が冥福を祈つたものは、その愛妾であつた。英雄の墓畔は一種の光彩に輝いて、まことや、此の世からなる好個の詩史を天地の間に顯出させるのであつた。

坂本龍馬

明治三十七年二月、陰雲漠々として東亞の天地を蔽ひ、日露の兩國がいよ／＼砲火

の間に相見えむとするに及び、昭憲皇太后には葉山の離宮に御避寒あらせられたが、或る晩、奇異な御夢路を辿らせられたのであつた。白無垢を着た一人の男が、御座所の入口にひれ伏して、『臣は御一新前に國事の爲に身を致しました坂本龍馬と申す者にて御座ります。海軍のことは當時から熱心に心掛けましたる次第にて御座りますれば、今回露國との戦端がいよ／＼開けました場合には、身は亡き數に入りましても、魂魄は御國の海軍に宿つて忠勇義烈なる我が軍人を護らむ覺悟にて御座ります。』と聞え上げたと覺される程に、姿はかき消す如くに消え失せたのであつた。『七たび此の世に生れ來て國賊を打ち滅すであらう。』とは楠木正成兄弟が最後の一念であつたが、忠勇義烈な偉人傑士が憂國の赤誠はまことや、その人の死と共に滅するものではないとして今しも皇太后の御夢に入り奉つた無雙の國士坂本龍馬は濤荒い南海の地が産した英傑であつた。

龍馬は父を八平直足といひ、一兄三姉がある。天保六年十一月十五日を以て土佐藩郷士の家に生れた人である。けれどもその幼時は活潑の氣象に乏しく、その容貌もさ

ながら愚人の如で、同年輩の友人等は龍馬と共に學問し、俱に嬉遊するのを悦ばなうだ程であつた。しかも龍馬は決していつまでも凡庸の兒ではゐなかつた。長ずるに及んで日夜眼を内外の書に曝し、同藩士日野根某といふ者に就いて劍法を學び、また某といふ者に從つて水泳の術を學んだ。一日、風は荒れて雨は狂うた。龍馬は篋笠を纏ひ平然として水泳場へと赴いた。と途中でその師に遇うた。師は龍馬を見ると、『お前は此の風雨のひどいのに何處へ行かうとするのか。』と問うた。龍馬は『先生にも御似合ひなされず、何といふ淺間しい御問ひをなされますか。私はこれから水泳の場へ行つて術を習はうとするばかりで御座りまする、先生には嘗て「水泳をせうとするのに濡れることを厭ふ様では駄目だ。雨風の烈しいことなどに辟易する様ではとても仕方がない」と仰有られたでは御座りませぬか。』というて悠々その課業を終へて歸つたのであつた。一意敢爲の氣象はこの間にもほの見えるのである。元來龍馬の志は國家天下の上にあるのである。區々一身一家のことを以てその身の任とする如き人士ではなかつた。『空しく海南の山間にあつて學んだところで遂に井底の蛙たるを免かれる

ことが出来ない。よろしく江戸に上つて廣く天下の名士と交りを結ぶべきである。』というて父に請うて東に上り、當時有名の劍客であつた千葉周作の門に入り、從うて學ぶこと數年、劍道を以て名を天下に知られるに至つた。

さる程に劍氣は天を衝いて尊王攘夷の論は海波を湧かし、山嶽を動かした。ところが安政元年の六月、近畿に地震があつたが、その十一月、更に土佐全國に亘る大地震があつて高知市の慘狀は言語に絶し、下町にも火災が起つて人馬の死傷するものその數を知らぬ程であると傳へられた。龍馬は父母の安否を氣遣うて取るものも取り敢えず、江戸を發して高知に歸らうと思ひ、先づ陸路大阪に至り、更に水路を取つて兵庫海を航した。玲瓏たる冬の夜の月は大空に凍つて打ち見やる遠近の島山は死したる様に静かであつた。とみる、天から降つたか、地から湧いたか、一隻の軍艦は濛々たる黒煙を吐いてその巨體を現はした。龍馬は傍らの人を顧みて、『あれは實に英吉利の軍艦であるが如何にも堂々たる有様ではござらぬか。彼れにはあの様な軍艦があつてその勢威を海上に縦まゝにしてゐるのである。吾が輩が如何に攘夷を口にしたところ

で、見れば我國の海防の如きは實に兒戯に等しいものがある。」と嘆じ、悵然として月の光りにその軍艦の行方を見送つたのであつた。

かくて國に歸ると討幕の説は滔天の勢を以て一藩を震蕩した。同志武市半平太等は竊かに長州の久坂通武や水戸の住谷寅之助等と策を連ね、詔を請うて幕府を討たうとした。時に龍馬は推されて長州に赴くの任を帯び、萩へ行いて久坂等と謀を合せ島津久光の、上京をその途中に待ちかけて事を舉げむとした。そこで龍馬は名を才谷梅太郎と更へて京都に上つたが、同志の徒は途に久光の爲に諭されてその舉を思ひ止まつたと聞えたから、龍馬は新たに方向を變じて江戸に入つた。すると藩では一隻の蒸氣船を長崎で購ひ、龍馬の甥に當る高松太郎は藩命によつて航海術を幕府の軍艦奉行勝安房に學んだ。ところで安房は當時早くも開港説を抱いてゐたので、尊攘志士の排斥するところとなつてゐた。龍馬また心に安房を憎み、一夜、千葉重太郎を語らひ伴れたつて安房を氷川の邸に叩いた。龍馬が名刺を通すると、安房は婢女の者をして龍馬を一室へと案内させた。そしてその隣室は安房の居間である。龍馬は刀を解き、

搦して進まうとした。『只今の時勢は實に不穩の極で、いつ如何様の事變が起るかも知れぬ。何卒、刀を佩いたまゝにて進みたい。』と安房は己れの居室から挨拶した。龍馬は靜かに安房の居間に入つた。温にして威ある安房が相貌は流石に重みがあつた。『殺氣面に進つてゐる貴殿が來訪の目的は、拙者もはやくこれを知つた。死生命のみ。拙者は決して徒らに生を惜む者ではない。けれども一先づ拙者をして國事に意のある所を吐露させて、然る後にどうともなされるがよろしいではないか。』というて、滔々數萬言、滿腔の熱血を注いで歐米海陸軍の盛大なことを説き、我が海軍の興起させざる可からざることを論じた。立論堂々、辭句明晰、龍馬は恍然としてまた一語の發すべきものがない。過つて改めるに憚るところなく、龍馬は身を安房の足下に投じて、こゝに安房の門下生となつた。英雄は英雄を知り、俊傑は俊傑を知つて、その師弟の情は骨肉も蝕ならなんだ。かくて安房は越前の松平春嶽公を介して龍馬が脱藩の罪を免されむことを豊信に請ふと、豊信はこれを赦したので、龍馬はこゝに郷に還ることゝなつた。

慶應元年、長州藩の久坂通武等は攘夷の期を朝廷に迫り、闕下に向つて兵戈を動かしたから、長藩は爲に朝敵の名を蒙り、百萬の天兵は旌旗堂々兵馬肅々として長州の國境を圍むに至り、龍馬は竊かに安房の家を去つて九州に赴き、同藩の同志中岡慎太郎等と劃策するところがあつたが、時しも長州藩の高杉晋作は奇兵隊を率ゐて馬關に兵營を構ひ、幕府の大軍を邀へて屢々これを挫くと聞いたので、龍馬は拮躍して薩藩の士西郷吉之助（隆盛）大久保市藏（利通）等に説き、『征長の總督尾州侯慶永には既に一たび福原越後等の首級を得て長州藩の罪を赦されたにも係はらず、幕府では復た徒らに無名の師を起して萬民の塗炭に苦しむを顧みず、猶は海外諸國の患ひをも知らぬ様子にて御座る。今日の急務たるや、早く幕府を倒し、國是を定めて國家の基礎を鞏固ならしめるのが何よりのことで御座る。討幕の機は至つた。失ふ可きで御座らぬ』と云うた。薩藩では議論百出したが、遂にはこの意見に左袒し、龍馬はこゝに轉じて長州に入り、桂小五郎（木戸孝允）三好眞三等に圖つてその同意を得た。すると幾ばくも經ないのに、黒田了介（清隆）は薩藩の公使となつて長州に來り、薩

長聯合のことに寢食をも忘れて奔走した。長州藩主は一藩の士人を聚めて評議に及んだ。桂小五郎・廣澤兵助・井上聞多・村田新六・大村益次郎・宍戸備後の面々はみな同列に居流れた。高杉晋作は先づ進んで言議を發した。『苟くも長州の男兒、一たび奮つて關東百萬の大兵に當る以上は、食盡き力極まつて而して後に止むべきのみで御座る。他人の力によつて事を成すは男兒の潔よしとする所でない。』と一座を見わたしてその所懐を披瀝した。とこれが駁論は桂小五郎によつて發せられた。『成程、痛快な御意見では御座るが、これ畢竟するに我が一藩の事のみを謀つた議論で、廣く天下の爲を思ふ御意見とは思はれない。よろしく速かに薩藩の意見を納れて國家の大勢を定めるの途に向ふべきで御座る。』甲論じ、乙駁し、丙和し、丁撃つて議は容易に決しない。よつて明日を期して一先散會したが、夜になつてから龍馬は小五郎と共に晋作の家を問うて懇々としてその説を辯じ、遂に晋作をしてその意に従はしめ、維新史上に特筆大書すべき薩長の聯合はこゝに成つたのであつた。

この頃、京都に醫師の檜崎將作といふ者があつて夙に勤王の論を唱へ、頼三樹三郎

等と相往來したが、安政の獄が起るに及んで、その身は牢中に死する様になり、その家に妻と二男三女とがあつたが、その長女は名を龍子というて膽氣男子を凌ぎ、三女は名を君江というて容姿雨に惱める梨花にも譬ひつ可きものがあつた。龍馬は曩に江戸に遊ぶ途中に京都を過ぎ、端なくこゝに檜崎と相知つてからといふものは屢々その家に泊つたが、檜崎が死してその家は漂零し、母子離散の憂目を見る様になつたので龍馬は不憫の情に堪へず、その長子と君江とをば勝安房に托し、龍子をば伏見の寺田屋に預けた。とこゝで、此の寺田屋は薩藩の定宿で、女主の登勢は當時伏見の女將軍と歌はれて俠名志士の間に慕しかつた人であつたが、今や一諾能く龍馬のたのみを納れて懇ろに薄命なこの一少女龍子を養ふことになつたのであつた。さて慶應二年一月二十三日、彼の薩長聯合の事は全く成つたので、龍馬は京都の薩藩邸を辭し、夜になつて寺田屋へ歸ると、長州の同志三吉慎藏はあわたししく出で迎へて聯合の成行如何を問うた。龍馬は委細を語つて、明日慎藏を薩藩の邸に伴はむことを約した。然るに夜は今しも八ツの刻とも覺しい頃、伏見町奉行の指圖によつて數十の捕吏は寺田屋の

屋外を圍んだ。劔光闇を研つてやがてはその身に迫らうとするをば固より知る由もなく、龍馬と慎藏とは樓上にあつた。捕吏は忍びやかに寺田屋の門を叩いた。女主は戸を排して靜かに外に出ると共に捕へられた。時しも龍子は浴室に居たが、窓外の足音が只ならぬ氣合に急ぎ衣引き纏うて樓上に至り、急を龍馬と慎藏とに告げた。龍馬は短銃を握り、慎藏は手槍を執つて出でた。捕吏の徒は燈を挑げ、槍を揮ひ、火鉢を投げて迫つた。龍馬は暗中に奮闘して身に傷を負うたが、窓を破つて屋に上り、暗に紛れて遁れ走り、行くこと數町、一夜を路傍の材木置場に明かして、纔かに生を得たのであつた。かくて龍馬は京都の薩邸に入つた。可憐なる女性の龍子はまたこれに從うて看護に餘念無く、一世の豪雄と、一代の烈女とはこゝに濃やかな鴛鴦の契りを結んだのであつた。

さて慶應二年正月、幕府は遂に大舉して長州を攻めたが、薩藩では早くも長藩と連合して幕府の軍に當るべきの内約があつた。しかも天下の耳目を憚つて未だ公けには長州を援はない。龍馬は天下の爲にこれを慨し、薩藩の家老小松帶刀に見え、拙者

は鹿兒島に歸つて浪士を糾合し、海軍を編制して、日は貴藩の片臂となし、日は長藩の急を援はむ所存にて御座る。御差支御座るまいか。」と云ひ込むと、帶刀は西郷隆盛等と謀つて、「貴殿が一己の資格を以て長州を救はれるのは何より結構の次第にて御座る。」と答へたので、龍馬は雀躍并舞して直ちに九州に下つた。妻龍子もまたこれに従うた。かくて鹿兒島に着くと、馬は龍子を留めてその家を守らせ、自ら長崎・馬關の間を往来し、長藩と謀を合せて幕府の舉動を視うた。さてこの歳、夏六月、幕府の軍は海陸兩道から並び進んで長州藩を攻めた。長州海軍の將高杉晋作は數隻の軍艦を率ゐてその海軍を禦いたが、龍馬の來り援ふに及んで大に喜び、龍馬を推して參謀と爲した。幕府では回天・富士・鳳翔・迅動の諸艦を馬關近海に泛べて氣勢を示した。七月三日、曉霧は海を蔽うて咫尺を辨じない。龍馬は晋作と謀り、機に乗じて幕艦の背後を衝かうとし、巨砲を櫻島丸に載せ、自ら長州の三艦を率ゐて幕艦を襲うた。幕軍の將榎本鎮次郎は嘗て和蘭に航して海戰の術を學んだ者であるが、衆を屬まして大に戰ひ、終日にして勝敗は決しない。兩々相持すること數日、七月十二日を

以て將軍家茂は薨じ、八月十日、小倉城陥つたので、征長の軍はこゝにやみ、龍馬はまた薩摩に歸つた。折から土佐藩の參政補後藤象次郎は軍艦購求の藩命を帯びて長崎に居つたが、龍馬と相見え、臂を把つて一堂に故國の風雲を談ずるに及び、肝膽相照らしてさながら十年の舊心の如であつた。象次郎は龍馬を藩主豊信公に介してその海兵を以て藩の守備に充てさせた。海援隊といふのは即ちこれである。同じき三年四月、龍馬は海援隊の一汽船伊呂波丸を率ゐて銃彈を神戸に送らうとし、三原の海峡にさしかかつた。時しも微雨は蕭々として降り、濃霧は海面ひろく立ち蔽うた。よつて龍馬は汽船の速力を緩めて進ませた。と忽ち一艘の大船が舷燈を閃めかして來り進んだ。龍馬は大に驚き、急に舵を轉じてこれを避けようとしたのに、此の時遅し、彼の時速し、大船の艫首ははやくも伊呂波丸の右舷に中り、霹靂一聲、海水は忽ち伊呂波丸に浸入して船首は將に沒せむとした。龍馬は號令一番、身を躍らして大船に飛び移つた。隊士もまた續いてこれに飛び移つた。そして我が船を顧みると、水面纔かに橋頭を餘すのみであつた。隊士は船旗を擁し悄然として汽船に便乗して瀬ノ津に至つた。その

途中に汽船の船長は、「我が船は明光丸というて紀州藩の所有に係るもので御座るが、今回、長崎に航せむとして測らず、この厄に遭うた次第にて御座る。弊藩の役吏は長崎に居るから、談判のことも願くば其の地に於てほしい。」といふ。龍馬はこれを承知した。船はそのまゝにして長崎に着いた。龍馬は直様この顛末を舒べて紀州藩の官衙に訴へるところがあつた。『明光丸は航海の法に背いて橋燈をば點せず、當番の士官をも置かない。その罪は全く明光丸にあることで御座れば、よろしく償金を出してその罪を謝すべきで御座る。』紀州藩ではこれを斷つた。龍馬は後藤象次郎と圖り、『海援隊の浪士は紀州藩の亡狀を憤つて讐を復しようとして脱藩する者既に數十人になつた。』というて流言を四出させた。それに紀州藩に在つては明光丸の船長が口述するところが更にその確證が無かつたから、終に十萬餘兩の償金を龍馬に納れてその罪を謝することになつた。さる程に薩長の連衡は益々密切になり、堂々兵を出して幕府を討たむとした。土佐藩主山内豊信は天下の大勢を察し、今や如何にしても幕府を輔くべからざることを知り、慶應三年九月、後藤象次郎・福岡孝悌等の藩士を使として主

政復古の議を將軍に上らしめた。慶喜は流石に水戸齊昭の子であつた。夙に國體の尊嚴を知り、尊王の大義を辨へて居たから、會津・桑名の諸藩が血氣に逸つた議論を押へて、十月十三日、諸侯以下を二條城に召し太政返上の奏文案を朗讀し聽かせて諸侯の意見を問うた。龍馬は小松帶刀・後藤象次郎等と相並んで末席に在つたが、頻りにその得策であることを賛して太政返上の實を立てむことを促したのであつた。かくて太政は奉還せられた。慶喜の公義は日月と光りを争ふものがある。『公の心中は實に同情に堪へない。予は必ず一命を以て公を護り、天下の爲これに報ずるところがあらねばならぬ。』というて龍馬は熱涙を絞つたのであつた。

さて當時會津藩士に佐々木唯三郎といふ京都守護職の取締があつたが、久しく龍馬の首を狙つてその追跡にのみ腐心した。ところで十一月十五日の夜、龍馬はその旅寓なる川原町の醬油店に中岡慎太郎等と相會し、痛飲淋漓國事を談じようとしたが、同志の者は酒肴を調ふべく出かけ、龍馬と慎太郎とのみ階上に相對してゐると、忽ち見る、數人の刺客は氷刀を閃めかして肉薄した。電火か、石光か、龍馬は叱咤刀を執り

慎太郎は切齒短刀を揮うて刺客を邀へたけれども、共に鞘を拂ふの違もなく、龍馬は頭に二個所の重創を負うて倒れ、慎太郎は奮然縦横、身に十數創を蒙つてまた倒れた。龍馬は『遺憾々々』の嘆聲を漏らしつゝ、慎太郎を呼んで、『中岡、如何したか。手は利くか。』と問ふと、慎太郎は、『無念ぢや。利かぬ。』と答へる。『僕は深く頭を道られたからもう不可ん。』といふのが龍馬の最後の言葉で、年僅かに三十三、行先望み多い一代の烈士は夜半の嵐に散り失せたのであつた。京都東山の鷺尾墓畔・坂本・中岡二烈士の碑石は相並んで立つてゐる。そして血を吐いた墓畔の紅葉に降り濺ぐ秋雨はさながら心あるに似て今も人の袖を絞らせるのである。

西郷隆盛

「我が家臣は多いけれども、大いに用ゐるに足りる者が無い。獨り西郷吉之助は薩摩の寶でござるが、もとゞゞ獨立不羈の大人物であるから、これを用ゐるもの、拙者を措いては他にござるまい。」とは當時一代の明主として嶄然として三百諸侯の間に頭角

を抽でてゐた島津齊彬が松平容保に語つたところであつた。

西郷吉之助とは即ち西郷隆盛のことである。隆盛は實に文政十年十二月七日を以て鹿兒島城下の加治屋町に生れた。幼にして藩侯の近習役となつたが、その異才は早くも藩侯の認める所となつて寵愛一方ではなかつた。で、藩侯は近習の者に命じてその暇々の日には専ら武術を講じさせたのに、人々はみな汲々としてこれが修業に餘念なかつたけれど、隆盛は少しも意とせず、暇の日には必ず、悠々、竿を携へて江潭に遊ぶのであつた。そして同輩のものごとやかくと藩侯に告げると、藩侯はたゞ、『其方共の知るところではない。』というて一向に問ふところが無かつた。たまゞゞ大夫の何某といふものが藩侯を直諫し、侯の嚴怒に觸れて死を賜はつたが、隆盛の父の吉藏は常にこれが門下に入してゐたので、その臨終に際して大夫から遺物を贈られた。吉藏は家に歸り、これを抱いて泣いた。すると隆盛はその時まだ十四歳の少年ながらもその傍にあつて共に泣いた。吉藏は問うた。『お前も矢張り悲しいのか。隆盛は答へた。』左様にて御座ります。けれども私の悲しみまするのは、未だ私が幼ない爲に此人

と一緒に直諫することの出来ないのを悲んで泣くので御座ります。聞かぬ者みな涙を流して隆盛の人と爲りを賞嘆せざるものは無かつた。隆盛は殊更に眼が大きかつたから、父はいつも隆盛のことを呼んで「巨眼」というた。長ずるに及んで志を天下に抱き、廣く交りを名士に結んだが、この頃水戸の藩士藤田東湖の名聲は天下に高く、海内有志の徒はみなその風貌を望んだのであつた。隆盛も江戸に入ると直ぐ東湖を水戸藩の邸に問うた。と東湖は隆盛を迎へてこれを室内に延き、「貴殿には態々御來訪のところ拙者は今しも藩侯の命によつて朝に至らむとするところで御座れば、貴殿には何卒しばらく御待ちあつて欲しい。」というて出で行いた。とみる、座上に一振の太刀はあつてその裝飾は美麗を盡くしてゐる。隆盛は起つてこれを取り、鞘を拂つてながめやると、光彩陸離として眼を射た。茲にその利鈍を試みるべく、打ち揮つて村を斫り、肱を曲げて打ち臥した。しばらくすると東湖は歸つて來た。見れば刀痕は柱に新らしく、木屑は座に満ちてしかも隆盛は雷聲の如くに寢入つてゐるのである。やゝ久しうして隆盛は眠りから醒め、木屑を捫つて國事を談じ、一語刀のことに及ぶもの

なくして去つた。これによつて東湖は隆盛が不世出の人傑であることを知り、「他日わが志を繼ぐものは獨り此少年あるのみであらう。」というたが、隆盛もまた、「天下畏るべきものはない。唯だ畏るべきものは東湖先生一人のみである。」というて、非常に東湖に推服したのであつた。かくて隆盛は近衛公の密旨を奉じて江戸と水戸との間に往來し、また京都の僧月照等と國事に狂奔したが、爲に幕府の追跡を蒙るの身となつて一たびは薩摩瀉に身を投げ、更に大島に配所の月を見ることとなつた。ところで隆盛が大島に流されたのは、今回で丁度三度に及んだから自ら姓名を改めて大島三右衛門と稱し悠々として胸中の閑日月を養うてゐたが、時勢は遂にこの英傑をして永く孤島の荒濤に嘯かきしめなだ。元治元年の春、一片の書は隆盛をして孤島から藩に還らせ、國政に參與させた。慶應元年、幕府で長州征伐の師を始めた。時しも、三條實美は筑前に居て幕府の忌む所となり、將に幕府の爲に幽囚の身とならうとするのであつたのを、隆盛は頗る周旋して漸くその事無きを得させた。再度の長州征伐の軍が起るに及んで隆盛は鹿兒島に居たが、幕府が妄りに無名の師を起したのを憤り、銳意、

長州に往復して薩長の聯合を成立させ、同じき三年十二月には朝廷の大会議に與かつて賛畫するところが多かつた。

明治元年、官軍が東海道を徇へるに際し、總督府の參謀として山川に抵ると、徳川氏の臣勝安房はその營に詣つて隆盛に見え、具さに徳川慶喜が恭順謝罪の状を述べて聲涙俱に下つた。よつて隆盛は駿府に入つて有栖川大總督宮に委細を問え上げ、猶ほ京都に往いて三條實美・岩倉具視・大久保利通・木戸孝允等とこれを謀るに及んで、紛々たる衆議を排して絶對に平和説を主張し、爲に江戸城を引き渡すに於ては慶喜の死一等を減じて水戸に謹慎させることとなり、四月十一日、城地授の式を終つたのであつた。これより總督府を江戸に置いて隆盛は諸軍を指揮することとなつたが、いつも長州の藩士大村益次郎と共に軍事を掌つて、その戰略眼に服し、兵制のことはたゞ益次郎とのみ決するのであつた。

明治二年、隆盛は功績を以て特に賞典祿二千石を賜り、四年、正三位に叙し、參議に任せられ、五年七月十九日には陸軍元帥を兼ねて近衛都督のこゝろを行ひ、同月二十

九日には陸軍元帥に任じ、參議を兼ね、六年五月十日には陸軍大將に任せられ、參議を兼ね、隆盛の聲望は眞に海内の山河を壓して隆かつた。此間、四年七月十四日を以て廢藩置縣の令は布かれ、五年十一月二十八日を以て徵兵令は發せられ、西洋の文物制度は採用せられて百揆悉くその面目を改めた。隆盛の力に負ふところ甚だ多かつた。しかるに六年十月十四日、征韓論が閣議に上ると、もに、倭焉として暗雲は隆盛の身を蔽ふに至つたのであつた。

維新の初めに當り、我が政府は王政復古の趣きを朝鮮に報じて好みを修めむことを告げたのに、朝鮮ではその國書に『大日本皇帝勅』といふ文字のあるのを見、これまでの例と違つてゐることを論じてこれを受けない。のみならず、國中に觸れを出して散々我が帝國を罵倒し、日本人とは交際することを禁じた。上野外務少輔は正院に馳せつけてその旨を述べ、よろしく一刀兩斷の處置に出づべきことを痛論したが、時しも岩倉具視・木戸孝允・大久保利通・伊藤博文等は歐米の視察に往いた後で、隆盛及び三條實美・副島種臣・後藤象二郎・板垣退助・江藤新平・大隈重信等は内に在つ

たが、隆盛は親ら雷つて、「使節を朝鮮に遣はされようとならば、拙者身を以てこれに當るで御座らう。」と進言した。よつて實美は時しも箱根温泉に行幸なされてあらせられた明治天皇に拜謁してその由を聞え上げ、岩倉一行が歸つたなら、いよくその事を擧げむとしてゐた。さる程に六年九月十三日、岩倉大使の一行は無事歸朝した。けれどもまのあたり西洋文明を視て来たこれ等の人の意見が朴直勇猛な征韓論者の意見と一致することは固より望まれぬ。十月十四日の廟議は紛々として決しない。最も大事な十七日の廟議には具視・孝允・利通等はみな病というて來朝しない。そしてその翌日の廟議には實美までが病に事よせて顔を出さず、具視・孝允・利通等はみな辭表を出して朝しなしたのである。隆盛等は痛憤席を蹴つて退いた。さて勅命により、二十一日になつて岩倉具視は三條實美に代つて太政大臣となつた。そこで隆盛等は具視の邸に赴いて使節のことを催促すると、具視は言を左右に托して答へない。こゝに至つて流石の隆盛も、「長袖者流、與に國事を談するに足らぬ。」と憤慨激越し、江藤新平は切齒瞋目、具視に向ひ、椅子を蹴倒して退いた。翌二十三日、隆盛は一切の官職

を辭し、江藤新平・副島種臣・後藤象二郎・板垣退助の諸參議はその翌日になつてみな辭表を呈した。かくて隆盛は飄然都を辭して鹿兒島に歸り、陸軍少將桐野利秋・同僚篠原國幹・同村田新八等何れも職を辭して隨ひ歸つた。それと與に鹿兒島・高知・兩縣の軍人で、病と稱して官を辭する者、除隊を乞ふもの日々數百人を算するに至り陸軍郷輔はその勢の如何とも致し難いので、事情を奏し、特旨を以て士官以上はその職を解き、下士以下は除隊を許したのであつた。かくの如く征韓論者は今や野に下つたのである。そしてこの在野派はまた二つに分れたのである。即ち隆盛を中心とする鹿兒島私學校の尙武主義派と退助を擁立する高知立志社の民権主義派とである。そして佐賀の亂は早くも勃發して江藤新平は斷頭臺上の鬼と化し、萩の前原一誠・熊本のおぼた黒伴雄等は相前後して事を擧げたがみな敗れた。隆盛にして一片亂を思ふの志があつたならば、多分此の間に呼號して起つたのであらう。けれども隆盛には少しもその様な志は無い。今の新政府とは反對であるが、決して輕舉して事を誤らうなどいふ心は無かつたのである。政府が威信を失うて瓦解するか、政府が處置を誤つて國

威を墜すかの場合に猛然として蹶起する積りであつたのである。隆盛が私學校生の江藤新平に相應じて起たむというたのを卻けたのは全くこれが爲めである。また彼等が前原一誠の亂に乗せむことを勧めたのを叱したのも全くこれが爲めであつた。しかし私學校黨の積憤は機だにあつたならば今にも勃發せずには止まじと見られた。たまたま中原尙雄等は政府の探偵として鹿兒島に入り込んだが、その舉動が何如にも怪しいので、私學校黨では谷口藤太といふものをやつてこれを探らせ、尙雄を捕へて詰問すると、尙雄は『私學校黨を離間して撲滅すべき命を受け、その他、臨機の處置を取るべきことを許されて御座る。』と答へたので、私學校黨の憤怒は天を衝いて發した。直ちに奔つて造船所の庫を破り、その屬舎や、礮の火藥庫に亂入して小銃の彈藥二萬四千發を掠奪した。矢は既に弦を放れたのである。この時隆盛は大根占から大隅の高山あたりに遊獵中であつたが、逸見十郎太等が來て事の由を告げたので、喟然として天を仰ぎ、『あゝしまつた。』と思はず、溜息を漏らした。さりとして江東八千の子弟を捨てるには忍びない。隆盛は子弟の爲にその一身を犠牲にして起つたのであつた。英雄の

心事、偲び來れば誰かまた涙無きを得ようや。總勢は一萬五千、篠原國幹・桐野利秋・村田新八・永山彌一郎・池上四郎・逸見十郎太等、將はみなこれ一騎當千の士。更に熊本の上池邊吉十郎は千餘人の同勢を率ゐて來り會し、猶ほ舊諸藩の士、風を望んで來り投するもの多く、總勢今や二萬、旗は輝き、劔は閃めき、馬は勇み、士は躍り、寒風身を切る十二月の半ば過ぎ、降り積つた白雪を蹶立て、熊本城をおつ川り捲いたこの時、熊本鎮臺の司令長官は陸軍少將谷干城であつた。陸軍中佐の樺山資紀はこれが參謀として全軍僅かに二千、西郷が軍を喰ひ止めくれむと雄叫んだ。さる程に官軍は大に馬關・博多の間に至つた。彼我の接戦は植木坂に開かれた。攻圍は月餘に亘つて援軍は未だ到らず、熊本城の運命は日に迫つて行くかとはばかりに思はれたが、やがて援兵は至つて薩軍は田原坂の一戦に脆くも敗れ、篠原國幹は吉次越に戦死して山鹿はその守りを失ひ、官軍と熊本城との聯絡はこゝに成つて、御船・保田窪・人吉三井田等十餘箇所に於ける激戦はまた何れも隆盛の軍が敗北となつたので、今やその勢は日に益々非である。よつて隆盛は八月十九日、桐野利秋・逸見十郎太等と孤軍

奮闘園みを衝いて出で、一百の里程、壘壁の間を経て、郷里の鹿兒島に入り、城山に據つて花々しい最後の戦に出でむとするに至つた。官軍は追撃してこれを取り圍んだ。薩軍、壁に嬰つて拒ぐこと三旬、弾は盡き、糧は竭いた。今日しも九月二十四日である。惘然として眼を擧ぐれば、霧氣大空に横はつて落葉雨の如く、砲聲段々、四邊を動かして光景の惨憺いふばかりも無い。薩軍の諸壘は悉く敗れた。敗兵は齊しく岩崎谷に集まつた。彈雨啾々として亂れ至り、隆盛の腰・脚またその傷けるところとなつた。萬事は休した。儼然として端坐し、雙手を合せて東天を伏し拜み、別府晋介を顧みて介錯させた。晋介は涙と共に隆盛の首を落し、その従卒吉左衛門といふ者に命じて首を折田正助が家の門前に埋めさせ、馳突數刻、「先生已に死した。先生と死を共にする者は來つて是に死せよ。」と打ち呼ばはつて彈丸雨注の間に斃れた。桐野利秋・村田新八・逸見十郎太等四十餘人、みな死を共にして薩摩武士の最期を飾つた。間もなく官軍では隆盛の首を見出した。「あゝ、翁の顔容の何といふ溫和なことであらうぞ。我をして二十餘旬、睫毛を合せるに違なからしめたのは、全く翁があつたから

である。翁は誠に天下の豪傑である。そして我を知るもの翁に如くはなく、翁を知るものまた我に如くはない。さるにても翁をして今日あるを致さしめたものは、實に實に残念な次第ぢや。」と馬上に嘆じて數行の落涙留めもあえなんだ參軍山縣有朋が戎衣の袖にはら／＼と加ふる城山松の下露は冷やかであつた。

炎々烈々たる情熱の前に彼の冷やかな理性が果してどれ程の權威を持つてあらう。吁我が大西郷！その生涯を通じて何といふ詩的なことであらうぞ。何といふ情的なことであらうぞ。見よ、一たび美しい同情の焰に胸が燃えると、維新の元勳參議陸軍大將の榮冠を捨てることさながら糞土の如く、身をば子弟の犠牲として千秋叛賊の醜名を負ふことを辭せず、孤軍奮闘、劔摧け、馬斃るゝに及び、秋風に笑つて形骸を故山に托した英傑の一生はそのことそれ自身が好個の一大叙事詩ではないか、一大抒情詩ではないか。英傑、翁の如きものあつて、乾坤爲めに寂寞たるを感じない。

大久保利通

四谷見附で街鐵の電車を下り、外濠にそうて南すると赤坂御所の門に至る。明治十年代前後は假皇宮であつたが、今は皇太子殿下のゐらせられるところで、青山御所が西に連つてゐる。そして御門前の南に下る坂を紀伊國坂といふのは、赤坂御所の處にもと紀州侯の屋敷があつたからであらう。御門前から外濠を内に入るところを喰違といふが、直に下る坂を紀尾井坂というてゐる。つき當りに紀州侯、左右に尾州侯と井伊家との屋敷があつたから、三家の上の字を取つて紀尾井坂と呼ぶのである。維新三傑の一人大久保利通が刺客に殺されたのはこの坂下で清水谷といふところであるが、三條實美の書に係る巨大な哀悼碑が立つてゐる。そしてその後の丘には、當年、公が濺いだ鮮血の色を思はせる躑躅が疎々の地を彩り、前には松あり、櫻あり、また小池があつて鯉が泳いでゐる。仰いで公の偉勳を忍ぶべく、俯してはあたりの景色に俗鷹を洗ふことが出来る。

大久保利通

大久保利通は西郷隆盛と同じく鹿兒島藩士で、小字を正助といひ、幼い時から沈重で慾心が寡く妄りに言笑せず、群童と嬉戯するにも自ら凡人輩とはその態度を異にして常に一群の魁首となり、その一群を稱して天皇組というた。長ずるに及んで容貌魁偉に、萬人望んでこれを畏敬し、利通を視ること師父に過ぎるものがあつた。西郷隆盛や大山格之助(巖)等と交りが深く、後には隆盛等と共に禪學者の隅元某といふ者に就いて佛書を講じ、三年間の坐禪を経て大に得るところがあつた。二十歳の時に出でて藏方下代となり、記録所筆者に轉じ、島津久光の住む西丸の側役に遷つたのであつた。是れより先、幕府では諸外國と互市貿易を開いたので、天下慷慨の士はみなこれを憤り、外人を視ることさながら禽獸の如く、英人が島津久光の前驅を犯すと、劔光進つてこゝに所謂生髮の事變をまで生じたのであつた。すると英國の公使はこのことを幕府に訴へて嚴重にその處置を求めた。幕府では周章狼狽し、薩藩に對して速かに家老の諏訪某を出府せしむべきことを傳達した。事態もとより容易ではない。よつて利通は京都・攝津の間に奔走し、隆盛は京都に上つて大に斡旋するところがあ

つて、その結果諏訪某をば急に病と稱して國に歸らせることとし、利通は吉井友實と共にこれに代つた。そこで利通は友實と共に大阪城に至ると、幕府の元老久世大和守は利通等に會うて談議に及んだ。『先に薩藩の者共が英人を生麥に殺した廉を以て英國公使の償金を幕府に督促することは前よりも急である。そして若しもこれを拂はぬ場合合に於ては英國では直様軍艦を浮かべて薩藩に向ふべしとの由である。徒らに猶豫すべきの時では無い。よろしく速かに償金を出して事を穩便の裡に取り決めるがよろしいであらう。』機略縦横の利通は耳の聾えぬ振りして、『幕府に於て薩藩を討たれやうと思されるならば、事また誠に已むを得ざるものが御座ります。拙藩にてもその用意は御座ります程に、敢て自ら屈する様のこととは致さぬで御座りませう。』と答へた。大和守は再三これが辯明を試みた。利通は逆上を口實として席を退き、國に歸つて藩主にその旨を申し上げた。かくて邊海防禦の令は一藩に下つた。尊王攘夷の説は海内志士の熱血を沸かしめ、燕趙悲歌の士、京都に雲合霧聚して公卿を動かし、公武の間は漸く分離するに至つた。此時に際り、利通は藩侯の内意を承けて京都に上り、公武

の間を一致させて攘夷の大目的を貫徹させやうと思ひ天下の公憤を抱いて、四方の名士と交りを訂し、一大旋風を捲き起して驚天の大活劇を演じようとした。たま〜藩主の島津久光は京都に上つたから、慷慨悲憤の士は久光を擁してたゞちに事を擧げむとした。久光はこれを憂ひ利通と大山格之助とを遣して鎮撫させようとしたけれど、人々は仲々これを聞き入れず、憤怒の情は發して寺田屋の變となつたのであつた。さて元治元年、長藩不平の徒が禁闕に迫ると、薩摩藩では會津兵を助けて長州を破つたので、これから薩長の間は相互に隙を構へたから、坂本龍馬は邦家百年の長計の爲にこれを憂ひ、利通と隆盛とを薩摩藩の邸宅に問うて縷々薩長聯合の策の忽かせにすべからざる所以を説いたので、利通等はいたくもその議に同じ、凡てを龍馬に任せた。よつて龍馬は轉じて長藩に至り、木戸孝允や高杉晋作等に會ひ、熱誠を以てまたその聯合の急務なことを説いたので、この二大雄藩はこゝに復び同一歩調をとることとなつたのであつた。彼の長州再征の議論が起るに及んで、利通は大阪城に登つて閣老の板倉周防守に見え、辞氣激切、凄風枯葉を捲くが如く、その施政のよろしからの趣き

を痛論して天下の大勢を述べたので、幕府は始めて利通の志を疑ふ様になつた。幕府の激徒は竊かに劔を懐にして利通を窺うたが、利通もよくその邊の消息を知つてゐたから、常にその居所を定めなんだ。しかるに或る日利通の居所を知つた激徒の者共は利通の寓を叩き、名刺を通じて謁を請うた。時しも利通は樓上に居たが、大刀を提げて下り來り、『大久保市藏はこゝに居る。來つて我に見えむとする者は何人ぢや。』と打ち呼ばはつた。英姿雋爽、眼光燦々として人を射るに、さしもの激徒も大に怖氣つき一言をまかへさないで去つてしまつたのであつた。猶ほ佐幕黨中にその人ありと知られた近藤勇等も幾度か一七を利通が身に加へむと欲したけれども、終にその機を得ずにしまつたのであつた。かくて利通は慶應三年、表面には國に還ると言ひ觸らし、て竊かに長州藩に引り、同志の者共と謀議を通じて京都に還つたが、たま／＼土佐藩主山内豊信はその臣の寺村大膳と後藤象二郎とを遣して大政返上の説を將軍徳川慶喜に逕達させ、利通も亦小松帶刀とともに其論議に賛成してひたすらこれが實現の運びに至らしめむことに力めた。と慶喜は時勢に鑑みて其説を納れ、直ちにその政權を奉

還したから、朝廷は新たに總裁・議定・參與などの職を置いたが、幕府の士はこれを喜ばず、物議は囂然として起つた。十二月、朝廷では斷乎として大策を決し、二條關白以下の公卿數名を罷め、徳川内大臣慶喜及び會津・桑名兩侯の參朝をさし止め、薩長・土の三藩に命じて諸門の守衛に充たせられた。とところで利通はそのことに與かつて多大の功績があつたから、參與に任せられた。時に慶喜は大阪から將に京都に入らうとしたのに、江戸に在つた幕僚の者共が薩藩の邸を襲うた報があつた上に、更に會津桑名二藩の兵が陸續として北上すると聞えたから、利通は速かに兵を伏見に出すべき事由を上疏した。朝廷では有栖川宮嘉彰親王を征東大將軍と爲して錦旗節刀を賜ひ、諸藩に命じて大に王事に勤めしめ、猶ほ大政が朝廷に歸したことを各國の公使に告げて入朝させた。一方、舊會・桑二藩の兵は京都を指して進んだのに、薩・長の成卒は伏見烏羽に邀へ撃つて大にこれを打ち破つた。さて幾くもないのに聖天子が大阪に幸なされ、更に帝都を東京に遷されることになつたが、これは全く利通の建議がその端を開いたので、利通の卓見高識は長く青史の上に赫々の光彩を放つてゐるのである。

また、利通は國費の足りないことを憂ひて薩藩の石高十分の一を献納するの議を案じたが、折りから木戸孝允は藩籍奉還の議を起したので、利通もまたその所見を同じうし、その議を提げて土・肥兩藩の間に奔走し、こゝに郡縣の制を定めるに至つたのであつた。かくて七月を以て參議に任せられ、九月、復古の功臣を賞するに及んでは賞典祿千八百石を賜はり、從三位に叙せられたが、利通は上表してこれを辭退しても許されなから、その賞典祿をば勸業寮の費途に献じた。猶ほ此の年に岩倉具視は毛利・島津の兩侯を召す、詔を奉じて大阪から長州・薩州へと赴いたが、朝廷ではまた利通を鹿兒島に、木戸孝允を山口に遣してこれに斡旋するところがあらしめた。しかるに島津公は病の故を以て參朝せず、大參事の西郷隆盛が代つて京都に上ることとなつた。そこで利通は木戸孝允・西郷隆盛と共に高知に赴き、大參事の板垣退助を語らうて上京し、こゝに廢藩置縣の事を決行した。かくて利通は參議を免して大藏卿に任せられたが、幾ばくもないのに又た制度取調事務を兼ねるの身となつた。そして當時猶ほ未だ攘夷の論が熄まず、外交のことは頗る困難を極めたけれども、利通は木戸孝允や

小松帶刀等と専ら開國の論を主張してその國策を紊らざるを得た。さて明治四年十月大使を歐米に派遣することに決定せられた時、右大臣岩倉具視は全權大使となり、利通は木戸孝允・伊藤博文等とその副使となり、此の月八日を以て東京を發して米國に赴き、翌五年三日歸朝して條約改正の事を建議し、更に復び米國に赴き、歐羅巴に遊んで宇内の形勢を悟り、六年五月、その使命を全うして歸朝した。たまた、西郷隆盛・江藤新平・後藤象二郎・板垣退助・副島種臣等の諸參議は廟黨の上に堂々征韓の論を高唱してその論は方に天下同憂の士をして血湧き肉躍らしめてあつた。しかるに利通は木戸孝允・伊藤博文等とその議を非として大にこれを諍論し、隆盛等の意見は終に行はれず、その同志は袂を連ねて職を辭し、これまで金石の交りも曾ならなんだ利通・隆盛は主義のためこゝに相離れることとなつたのであつた。その十月、利通は參議に任せられ、十一月、内務省が置かれるに及んで參議兼内務卿に任せられた。七年二月、江藤新平が佐賀に兵を擧げた際には利通はこれが鎮撫の命を蒙つて都を出でよく官軍を指揮し、その亂を平げて凱旋した。是より先、明治四年、臺灣の生蕃は琉

球の漂流を殺し、六年に至つてまた小田縣民が漂着したのを劫かして物を奪うたから臺灣征伐の議論はこゝに起り、隆盛の弟で陸軍中將であつた從道は都督に任せられ軍を率ゐて長崎を發することとなつた。と英米の公使は局外中立の説を執り、軍艦及び國人の傭役を辭したから、利通は命を奉じ、別に高砂社寮の二艦を購入して征臺の用に供せしめた。しかるに支那政府は我が國の征臺に異議を介んで彼我の談判は容易に決しなれたから、利通は勅を奉じ、全權辦理大臣となつて支那に赴き、總理衙門に至つて談判を開いた。が、論辯は數回に及んで定まらなつたので利通は大に憤り、袂を投じて國に歸らむとした。英國公使ソルウエードは衙門の囑托により、中に居て斡旋其だ力め、終に清廷から五十萬兩の償金を出すこととなつて、事件の結着を見るに至つた。

外事は既に平和に歸したので、利通は専ら内治に力を盡くさうとし、木戸孝允・板垣退助・井上馨・伊藤博文・黒田清隆等と大阪に相會して協和一致の當世に缺く可からざることを説き、東京に歸ると上書して、權に上下兩院を設け、貴族及び勳功學徳

あるものを以て上院議員に充て地方官を以て下院議員となし、そして民選議會の端を開かるべき由を聞き上げたが、やがて朝廷では、元老・大審の二院を置いて地方官會議を開いた。これ全く利通の發議に基いたものであつた。

既にして明治十年二月、鹿兒島の亂は勃發した。利通はこれを聞いて隆盛が子弟の爲にその身を誤らむとすることを憂ひ、『我が輩、西郷と隔たつてからは數年に及ぶけれども然も今往いて隆盛に見え、大義を以て彼れを説いたならば、彼れ必ず、我が輩の誠意を諒とし、その徒を制して大事を誤ることは無いであらう。』というて單身馳せて鹿兒島に赴かむとしたか、廟堂の諸公はみなこれを止めたので果たさず、命を奉じて大阪に駐り、三條・木戸・伊藤の諸氏とともに征討の事務を辦理した。しかるに間もなく事は平いだので東京に歸つた。十一月、功を賞して勳一等に敍せられ、旭日大綬章を賜はり、十二月、詔して佐賀の役及使清の功勞を褒めて正三位に敍せられ、年金七百四十圓を下賜せられ、是歳、内國勸業博覽會が東京に開かれるに及んで、利通はこれが總裁となり、博覽會の殖産興業に主要なことを知り、力を竭くして事に

従うたが、喬木風多く、英士世の誤る所と爲つて、十一年五月十四日、參朝の途すがら、清水谷を過ぎるに當り、島田一郎・長連豪等の爲に要撃せられた。路の傍へに待ち伏せた一郎等は白刃を閃めかして、砂を蹴て勇ましく駆け来る馬の足を掃つた。無禮者奴ツ。と利通は打ち叱りざま、身を輿の外にあらはさうとする東の間、毒及深く身に入つて、あはれや、英魂天外に飛揚した。年四十九、鮮血路を染めて、鬼哭秋々の聲は梅雨の天地に充ち満ちたのであつた。

木戸孝允

「膽あり、識あり、思慮周密、廟堂の論に堪へる者は長州の桂小五郎にして、薩摩西郷吉之助に次ぐの人なり。」とは慶應年中、坂本龍馬がその同志板垣退助に贈つた書簡に、木戸孝允を評した辭であつた。桂小五郎といふのは木戸孝允の幼名である。

孝允は天保十四年六月二十六日を以て長州藩の江戸屋横明に生れた。幼時大に驕悍不羈であつたが、その母がこれを憂ひて死するに及び、驟然として覺り、専ら書を讀

み、劍を學んだ。時に同藩の士吉田松陰は尊王攘夷の議を唱へ、氣節を以て一藩の士氣を鼓舞してゐたが、孝允は松陰の深知を蒙り、意氣投合して、高杉晋作・久坂通武等と文武の業に勤しんだ。さて孝允は後に京都に遊び、更にまた江戸に入つて劍を齋藤彌九郎の門に學ぶに及んで、その塾長となり、猶ほ有備館を日比谷の長藩邸に設けて文武修練の處となすに際つては、その都講となつた。それに孝允は夙くから水戸の學風を慕ひ、『常陸帶』や『回天詩史』等を愛誦してゐたが、今や國家漸く多事ならむとするの時に際し、屢々水戸の諸名士と臂を把つて時事を談ずるに及んで、胸中愛國の焰は炎々として燃え立つばかりであつた。それからまた此間に江川太郎左衛門や勝安房等の門に出入し、西洋の事情を聞いて得る所少からず、大に識見を長じた。で兼々邊海の防禦の忽かせにすべからざるを悟つてこれが測量に志を抱いて居たのに、たま／＼幕吏が江戸灣の内外を測量することがあつたから、孝允は變装して身を卒伍の間に交らせその測量を見ることを得たのであつた。さる程に幕府の威權は漸く衰へて慷慨の士は四方に起り、世運一大轉變の色は日を重ねて濃くなつたので

孝允はまた京都に還り、河原町なる長藩邸に居て公卿貴族の間に入出し、交りを天下の志士に結んで大に畫策するところがあつた。文久三年、徳川將軍の上京に次いで攘夷の親征を止める詔は出で、長州の支藩吉川監物は禁闕の護衛を解かれた。監物は書を上つて冤を訴へたけれども聽かれぬ。爲に兵を引いて國に歸つたが、河原町の邸にあつたものは皆従ひ歸つて留る者は孝允等僅か十八人のみであつた。かくて長藩士の不平は終に爆發して甲子の變となつたが、その事變に先づこと一日、孝允は早くも幕兵が河原町の邸を襲ふことを憂ひ、難を邸外に避けてゐたのであつた。しかるに一朝鋒を交へて長兵は敗れ去るに至つたけれども、孝允は猶ほ聖上の居ます京都を棄て去るに忍びず、殆んど危禍に瀕せむとした。ところが俠慧で氣節の高かつた歌妓の松子といふ者が身を以て孝允を護つたから、孝允は辛うじて虎口を免かれることを得た。しかも逮捕は益々急で、身を容れるに處が無い。よつて遁れて丹波に行き、身を博徒や酒客の間に寄せて時運を待つた。頃しも藩論は二つに分かれて俗論黨の氣勢獨り隆く、孝允は爲に藩に歸ることが出來ず、藩侯は屢々手書を賜うて孝允の辛苦

を慰め戒めて靜かに時機を待たしめた。幾ばくならぬに、高杉晋作等は大に士氣を鼓舞して俗論黨を討ち斥けたから、藩侯は孝允を丹波から召し還し、大監察に任じて庶政を總理させた。此に於て孝允は大村益次郎を抜擢し、和蘭式に準じて兵制を改めさせ、國勢爲に日を加へて擴張した。是より先、吉田松陰は罪を幕府に獲て小塚原の露と消えたので、孝允は小塚原に至つて恭しくそれを葬つた。かくて松陰が門下有爲の子弟はみな孝允を先輩と仰ぎ事ふるに至つた。さる程に幕府はまた一州征伐の軍を起したが、長州人は一藩を擧げてその方針を確定し、縦横に勵撃して大に幕軍を破つた。かくて討幕の先鞭はこゝに着けられると共に薩長聯合の大計は成立したのであつた。それと、もに朝廷では長藩の入朝を聽し、三條實美以下七卿の職を復した。政權の奉還と時を同じうして戊辰の亂があり、王政中興の大業は確立したのであるが孝允の力は西郷隆盛・大久保利通の力と相俟つて頗る多きに居つたことは更めて言ふまでもない。かくて孝允は召されて總裁局顧問となつた。

今や王政は復古した。けれども列藩は猶ほ依然割據の形を占めて各々にその封土を領し、兵を養ひ、力を蓄うてゐるのである。すなはち、王政の名はあつても、その實は無いのである。これでは、よしや、一旦、幕府は倒れたにしても、それで英雄が起つて復たび天下を争ふことが無いとは限らぬ。よつて各藩の封土を收め、これを朝廷の有として奸雄の野心を未然に防ぐのが何よりの急務である。故に孝允は一日藩侯を叩いてこのことを申し述べた。侯は沈吟良久しうしてこれに同意した。後、幾ばくもなくして孝允は車駕に従うて東京に至ると、大久保利通と會つてこの事を語り、遂に薩・長・土・肥の四藩は連署して封土や人民を奉還することになり、三百諸侯も相尋いでそれに倣ひ、藩籍を奉還し、明治二年正月を以て郡縣の制は定められたのであつた。さて是より前に、孝允は參與に在せられてゐたが、更に官制の改定があつて、朝廷では孝允の勤勞を賞し、劇職を解いて待詔院學士に補せられ、また此の年九月詔して大に復古の功臣を賞して孝允に祿千八百石を賜はり、從三位に叙せられた。三年二月、山口藩では兵制を改革して隊兵を解かうとしたが、驕悍な兵士共は仲々散せぬ

のみか、相謀つて藩廳を圍み、孝允を亡き者にしようとして搜索した。しかし幸にも孝允は其時外にあつたので馬關に逃れ出で、却つて人を遣つてこれを討ち平げさせた。五月、孝允は參議に任せられて隆盛・利通の二人と共に高知に至り、板垣退助等と打ちつれて東京に歸つた。

猶ほ孝允は條約改正に付いて非常に苦心する所があつたが、岩倉具視が特命令權公使と爲つて歐米の各國を巡察するに際し、その身は利通や伊藤博文等とともにこれが副使となり、大に得る所あつて歸朝し、彼の征韓論の旋風が廟堂を吹くに及び、孝允等はこれを不可とし、固く執つて動じない。朝議は終に非征韓論に決したので、征韓論者は一齊に野に下つた。かく征韓の論は已に定まつて内治の經營が漸く緒に就かうとするに際し、また琉球の人民が牛蕃の爲に虐殺せられたので、こゝに臺灣征討の件が起つた。孝允はこの時病床にあつたが、元來、沈着の人であつたから、決して一時を快とする如き議論は吐かず、大にその不可を論じたものゝ其議論は朝廷に容れられなだったので、五月、參議兼文部卿を辭して山口に歸つた。けれども大久保利通

は孝允が愛國の至誠を抱いて空しく江湖にあることを惜んで大に奔走し、八年を以て孝允は山口から、利通は東京から、板垣退助は高知から大阪に會して與俱に廟堂に立つに至つた。

斯様にして四月十四日、立憲の基本を定める詔は發せられ、地方官會議の開かれるに及んで孝允はこれが議長となつたが、爾來、孝允は益々心を内治のことに盡くしたのであつた。さる程に所謂乙亥内閣の軋轢なるものが起つて、島津久光・板垣退助等は職を辭して去つた。而して孝允の志は益々君國の上に傾けられたのであつた。「今や、一二の大臣は廟堂を知つた。一意、國家の難に當つて盡忠報國の跡を青史の上に残すべきである。」と奮起して自ら朝鮮の件に當らうとしたのに、天無情、俄かに孝允をして病の人たらしめたのであつた。なほ孝允は久しく下腹充血の症を患つてゐたが、病勢は益々進んで血管は弛み、胃に感じ惱に及んで、遂に脚筋の攣縮となつて歩むことさへ得ぬ様になつた。よつて黒田清隆・井上馨の二人が辨理の命を奉じた。ところで孝允は病の床にあつて大阪會議以來の事を回想し、心に慄く所があつて遷世

の念が胸中に動いたが、人々は強いてこれを留めた。明年三月遂に向く請うて參議を辭し、内閣顧問となつて閑職に居ることとなつた。と間もなく病は癒えたので、四月十四日、車駕は染井の別邸に臨まれたのであつた。孝允はこゝに聖恩の辱ないのに感激し、六月、車駕に従うて東巡し、親しく民庶の事情を觀て地方の衰殘を悲み、立憲政體確立の要を痛論した。十二月になつて鹿兒島縣令大山綱良は鹿兒島縣士族が他縣の士族とは其事情を殊にしてゐることを陳して便宜の處分を請うたが、孝允は政令が公平を全國に失ひ信を人民に缺いたならば、天下の事終にまた歸一するところのなくなることを懼れてこれを却けた。

明治十年一月、車駕上國に幸して、孝允またこれに従うたが、ある日、利通と一室に相見えて共に施政の方針を談じた。そして共に力を協せ國事に努め、やがてその還幸を待つて大に施政の改革を行はうとしてゐると、何事ぞ、薩・隅の天、雲は亂れて西南の亂は起つたのである。よつて孝允は奏して車駕を京都に駐まらせ奉り、征討の詔を發して自らそれが任に當らむことを請ひ、利通もまたこれと争うたが、天皇

には、『汝等は朕の股肱である。留まつて朕を輔佐すべきである。』と宣はれて許されな
い。かくて孝允は亂軍の暴戾を憤り、人民の痛苦を憂ひて、憂悶禁せず、病はまた
發して、肝臓肥大の症となり、日に／＼重り行いて、衰弱は日に／＼加はり行いた。
聖上にはいたくも震襟を惱ませられ、侍醫を差遣はして看護をせられ、ま 蘭醫のシ
ラルを東京から、軍醫監佐藤進を大阪から召て手を下させた。そして五月の十九日
には畏れ多くも鳳輦がその寓に臨まれたのであつた。時しも孝允に膝に臥してゐたが
聖天子の室に入らせられるのを見て、忝けなさに湧き出る涙を押へつゝ身を轉じて褥
を下らうとすると、聖上にはこれを差し止めなされて懇ろに慰問なされるのであつ
た。そして二十五日には勳一等に敍せられ、旭日大綬章を賜はつたが、孝允はもは
やとても起つことの出来ぬことを知り、國家の後事を遺言して二十六日、四十四の齡
を以て遂に此の世を去つたのであつた。

京都靈山の墓畔、孝允が赤誠は今も猶櫻花と相映發してゐる。

勝安房

「誰れでも責任をおはせられなければ、仕事の出来るものではない。おれが維新の際
に、江戸城引渡し談判をしたのも、つまり、將軍家から至大の權力を與へられ、無
限の責任を負はせられたので、思ふ存分手腕を振ふことが出来たから、あの通り、事
もなくすんだのだ。それに官軍の參謀は例の西郷であつたからちやんとおれの腹を見
ぬいて居てくれたので、大きによかつた。全體、これは別の話だが、敵に味方あり、
味方に敵ありといつて互に腹を知り合つた日には、敵味方の區別は無いので、所謂肝
膽相照らすとはつまり此處のことだ。明治十年の役の時に、岩倉公が三條公の旨を受
けて、おれに、「西郷がこの度鹿兒島で兵を擧げたに就いては、お前急いで鹿兒島へ下
向し、西郷に説諭して、早く兵亂を鎮めて來い」といはれた。そこでおれは、「當路の
人さへ大決斷をなさるなら、私は直に鹿兒島へいつて、十分使命を果して御覽に入れ
ませう」といつたら、岩倉公は「お前が大決斷といふのは、大方大久保と木戸とを免

職しろといふことであらう」といはれたから、おれは「如何にも左様で御座る」といつたら「それは難題だ、大久保と木戸とは國家の柱石だからこの二人はどうしても免職することは出来ない」といはれたので、「それでは折角の御命令であるけれども、とても御受けを致すことが出来ない。」といつておれは斷つてしまつた。處が後で聞けば、この時鹿兒島では、桐野が「旗擧げのごとが政府へ知れたら、今に勝麟が誰れかの密旨をうけて、やつて来るであらう」と西郷に話したら、西郷は「馬鹿をいへ、勝が出掛けてくるものか」といつて笑つたさうだ。どうだ、西郷はこの通りちやんとおれの胸を見ぬいて居たのだ。最早二十年の昔話ではあるけれども是等が所謂眞正の肝膽相照らすといふことの好適例だ」とは勝安房が西郷隆盛を追懐して人に語つたところである。これ位に美はしく肝膽相照らしたものがまたとあるであらうか。

『丁度明治元年 三月十四日、また品川へ行つて西郷と談判した所が、西郷がいふには「委細承知致した。しかしながらこれは拙者の一存にも計らひ難いから、今より總督府へ出掛けて相談した上で、何分の御返答を致さうか、それまでの所、兎も角も明

日の進撃だけは中止させて置ませう」といつて傍に居た桐野や村田に進撃中止の命令を傳へたまふ後はこの事について何もいはず、昔語などして従容として大事の前に横はるを知らない有様にはおれもほとく感心した。それから西郷に別れて歸りかけたのに、この頃江戸の物騒なことつたら、中々話にもならない程で、どこからともなく鐵丸が始終頭の上を掠めて通るのでおれもこんな中を馬に乗つて行くのは險呑だと思つたから、馬をば別當に牽かせておれはその後からほとく歩いて行つた。そして漸く城門まで歸ると、一翁を始めとして皆々がおれの事を氣遣つて、そこ迄迎へに出て居てたが、おれの顔を見ると直ぐに、まづく無事に歸つたのは目出たいが談判の様子はどうであつたかと尋ねるから、その顛末を話して聞かせた所が、皆も大層喜んで今しがたまで城中から四方を眺望して居たのに、初めは官軍が諸方から繰り込んで来るから、これは必然明日進撃するつもりだらうと氣遣つて居たが、先刻からはまた反對にどんく繰り出して行く様なので如何したのかと不審に思つて居たに君のお話であれば進撃中止の命令を發した譯と知れたといふのでおれはこの瞬間の西

郷の働きの行き渡つて居るのに感心した。談判が済んでから、假令歩いてとは云ふもの、城まで歸るに時間は幾らもかゝらないが、その短い間に號令がちやんと諸方へ行き渡つて一度繰り込んだ兵隊をまた後へ引き戻すといふ働きを見ては西郷はなかく凡の男ではないといよく感心した。畢竟、江戸百萬の人民が命も助かり、家も焼かれないで、今日のやうに繁昌して居るのは、皆西郷が諾といつてくれたお蔭だ』とは勝安房が江戸城明渡しの際の談判の際を追想して西郷を偲んだ言葉である。『英雄は英雄を知り、好漢は好漢を識る。』といふ言は度々繰り返される言葉であるが、勝安房と西郷隆盛との際會の跡を形容するには最も適應しい。

勝安房は徳川幕府末世の運命をその雙肩に擔つて起つた大政治家であり、また大英雄であつた。安政六年正月十三日を以て生れたが、人と爲り豪放不羈でその行狀はいつも常規を逸した。で幼時漢學の先生に就いたが更に以て事に勉めなんだ。けれども馬術と劍道とは幼時から得意とした所で、特に劍道に達してゐた。

天保十二年五月九日に高島四郎太夫が長崎から召されて徳丸ヶ原で試験的に大砲を

撃つたことがあつた。すると其時安房は齡十九の青年であつたが、其技術を見て深く感動し、劍道を思ひ切つて蘭學を學ぼうと志して、筑前藩士永井春崖の門に入り其人の力によつて自由に學習した。けれども當時蘭書は非常に高價であつたから、尋常の士流では容易に買ふことが出来ない。いつも春崖が秘藏の書を借讀したのであつた。また稜々たる俠骨を具へてゐた人で嘗て高野長英が獄を脱して府下に潜み、安房の門を叩いてその庇護を求めると、安房は心に長英を憐んだけれども、其身幕府の祿を食んでしかも幕府の罪人を庇ふはまた義に於て忍びないところである。よつて安房は長英に向ひ『予は何しろ幕府の臣であつて如何とも致し難い。しかしこの事を決して他人には告げない程に、二度と再び來てはくれないな。』と諭したので、長英は深くその志に感じ、『鉛外録書』を懐中から取り出して安房に與へて他日の紀念としたのであつた。さる程に嘉永六年、米國水師提督のペルリが浦賀灣頭に來つて開國の曙光があらはれると、老中阿部伊勢守は時の世界の大事を知らむが爲に蘭學者を四方から求めた。よつて安房は海防の意見を上言した。また安房は蘭書に基いて小銃を製造させたこと

があつたが、肥前の周津藩を初めとして諸藩からこれを依頼する者が多かつたので、安房は武藏川口の鑄物師に命じて野戦砲を作らせた。ところが、鑄物師は壓銅の分量を減じて銅質が緻密でない。そこで安房は大にこれを叱責すると、鑄物師は金五百兩を持参し、神酒料と稱して贈つた。宅房はそれを不審に思つて詰問すると驚くべきである、各方面の監督者はみな壓銅の分量を減し、過分の利潤を獲得して大金を賄賂に贈つたのであつた。安房は憤然として叱りつけ賄賂を斥けて更に精工の物を作らせた。幕臣大久保一翁は安房が人と爲りを知つて安政二年正月十九日これを蕃書反譯勤務に推薦した。かくて或ひは講武所砲術師範役に任せられ、或ひは大番々替を命ぜられ、或ひは海軍操練所教授方頭取を命ぜられたが、文久二年七月の四日には二九留守居格、軍艦操練所頭取、百俵加増布衣に進んだ。而して世の風潮は益々變調を來した。露國船は對馬に來た。品川東禪寺の亂入があり、和宮の東下となり、安藤老中の坂下遭難となり、生麥事件となり、幕府制度の大改革となり、品川御殿山の暴徒となり、終に將軍の上洛となつて、安房は漸く幕閣に重んぜられることとなり、同じき二年八

月十七日、將軍の前で軍艦奉行並を命ぜられたが、猶ほ其二十日、老中・若年寄・大目附・勘定奉行・講武所奉行・軍艦奉行等一同列席して所謂御前會議を開き、海軍擴張のことを論ずると、安房は、廣く人材を選抜すること、對馬を政府直轄となし、良港を開いて貿易地となし、朝鮮支那の往來を開いて海軍盛人の端を開かむことを計ること、また將軍上洛の砌には英國の汽船を用ゐむことなどを請うた。既にして内外漸く多事ならむとするのに、幕府の綱紀は日に弛んだから、安房は憤慨禁せず、横井小楠と與に閉鎖は末で興國は本であることを論じ、興國の大業は諸侯相一致して海軍を盛大にしなければ能くするを得ないと説いたけれども、これに賛成する人は至つて尠なかつた。先見の明ある議論がいつも俗受けをしないのは千古を通じて同一の嘆あらしめる。

安房をして大政治家の大手腕を揮はせたのは、全く明治戊辰の際、一部幕府内守舊主義の徒から霞の如き讒誣中傷の言辭を浴びつゝも、幕府を憂ふるの赤心は俯仰してまた聊かも天地に耻ぢることなく堂々乎としてその抱負終綸を披瀝した點にあつた。

是より先、徳川十五代の將軍慶喜は大政を奉還して將軍の職を辭したが、明治元年正月二十二日、會議集會を開設せむと建議する者があつて、二十三日の夜に安房は陸軍總裁・若年寄を命ぜられた。しかるに安房は即坐に若年寄をば辭した。時しも江戸城中は前將軍に拜謁を願ふ者や、或ひは恭順論と戰爭論とを聞はせる者や、簇々登城していつも夜を更して鶏鳴の刻に至るのが常であつた。二月十一日の夜、慶喜は恭順の旨を開き示して、朝廷から東叡山に謹慎を命ぜられたけれども、この日以前には主戦論者が盛んで或ひは國內の諸侯を結合すべきことをいひ、或は使者を出して官軍の入國を止むべきことをいひ、或は前將軍の君か單騎で上京せられたらば、總軍の士氣が盛んに起らむことをいひ、或は軍艦を監督して攝津の海に航せむことをいひ、或は軍艦を以て薩・長の二國を撃つべきことをいひ、衆論紛々として歸するところが無かつた。それを慶喜は天皇の神聖と國體の尊嚴とを説いて懇ろに諭し、十一日の夜を以てその嚮ふべきところを決したのであつた。かくて十二日慶喜は東叡山塔中大慈院に移り、安房は陸軍士官一同を集めて説諭し、十七日、越前藩を介して書を

參與に贈り、徳川氏の冤罪を訴へ此際官軍が餘程慎重の態度を取らねば却つて人心離散の基となることを辨じた。然るに當時安房は陰に薩長二藩と氣脈を通じて遊説してゐると疑はれ、襲撃射殺の難は日夜幕府の間からその身邊に逼り來るのであつた。さる程に安房は陸軍總裁を辭して軍事取扱を命ぜられ、三月五日に初めて山岡鐵太郎に逢うたが、一見直ちにその人と爲りに感じて鐵太郎のいふ所に従ひ、一文を草して駿府に留まつてゐた西郷隆盛の手許に贈つた。折から官軍將に大舉して江戸城を攻めるの説は起つた。安房は『官軍にして若し我が恭順の願意を容れることがなければ、予は先づ市街を火き、江戸を焦土となして戦ふであらう。府下百萬の生靈を救ふことが出來ぬとならば、寧ろ予はこれを殺し盡くして了はう。』と決心して、三月十六日、高輪の薩摩藩邸に入り隆盛に面談し、次の十四日にも會談して懐にしてゐた一書を參謀に呈した。『官軍にして漫りに脆弱の士民を劫かしたならば、我も亦これに應ずるであらう。皇國に忠あらむとせられるならば、よろしく條理と情實とを詳かにして後に一戦を試みられたい。我が軍も正不正を顧みて輕舉妄動はしない。事、若し敗れ

たならば千載の遺憾、海外の一笑を如何しようや。」といふのがその趣旨であつた。そしてまた隆盛に對して、「大政奉還の上は江戸の城下は即ち皇國の首府である。天下の首府に住み、我が家の興廢を憂ひて一戦を試み、以て我が國民を殺さむことは我が君慶喜公の決して爲られないところである。公平至當の所所ならば朝威はこれより興起するであらう。國の俗習は一洗されて和信は益々固くなるであらう。この點我が君のみ非常に憂ひられて、我々の解し得ないところである。」といふと、隆盛は、「私は今日この事を自分一人で取り定める譯には参りませぬ。明日出發してその趣きを總督府へ言上致すで御座りませう。然し乍ら明日進撃の令が御座りましたならば、如何とも致し難う御座りまするが慶喜公の御一命だけは吉之助誓つてこれをお譲り致すで御座りませう。」というて左右の隊長に一令を下し從容として相別れた。と同じき二十三日、佐賀藩士の島團右衛門といふ者が來て大原少將の旨を傳へ、「安房守殿にはよろしく速かに軍艦を朝廷へ献ずることを計らつて朝臣の列に入られうとなされては如何で御座るか。朝廷でも大に海軍を興起されようとなされてゐる場合で御座れば、大に貴殿を

用ゐられるで御座らう。」というた。けれども安房は答へない。同じき二十六日、安房は大原少將を尋ね、「主家の轉覆を捨て、朝家に仕へ奉るはこれ不義の賊にて御座ります。安房のよくするところでは御座らぬ。」というて其召を辭し、慶喜恭順の眞意を明察あらむことを願うた。しかるに復もや島團右衛門と夏秋又三郎との二人は來つて大原少將の命を傳へ、勤王の爲に出仕すべきことを勧めた。しかも安房は、「予が徳川氏の爲に盡くすのは、勤王に同じである。」というて聽き入れない。さて同月十一日、江戸城及び武器を官軍に交付し終つて慶喜は水戸に退いたが、中にはこれを不平に思ひ、城に血汐の花を咲かせて江戸幕府の末路を飾らうとする者もあつたけれど、安房は涙を揮ひ理を説いて懇ろにこれを諭すところがあつた。しかし、幕府の臣等は飽くまでも面白くない。暴行を安房の一家に加へる者もあつた。朝廷では此の五月二十四日になつて徳川慶喜を駿河・遠江・陸奥の中で七十萬石に封じ、駿州府中の城主たる可しと觸れ出されたので、翌廿五日、慶喜は蟠龍丸で水戸から駿府に移り、十月十二日を以て安房もまた駿府へと従つた。それから安房は専ら徳川家善後の計の爲に盡

力したが、明治二年七月十八日を以て外務大丞を命せられるに及び、十九日には慶喜の謹慎御免を願つたのであつた。かくて全く王政維新の實が擧がるに及び海軍大輔・参議兼海軍卿・樞密顧問官等の榮職を経たが、明治三十二年一月を以て世を去つた。西郷隆盛を詠じた薩摩琵琶歌城山の曲は最もよく人口に膾炙してゐる。

伊藤博文

武士ではないが、いつも『おれは武士ぢや、武士ぢや。』と竹切れ木切れを腰にして自ら高く止つた幼兒が『三兒の魂』はよく百まで續いて、維新の風雲に際會しては参職となり、参議兼工部卿としては泰西文明の輸入者となり、尋いで憲法の起草者となり、立憲治下の内閣總理大臣となり、全權辨理大臣として前には、天津條約の調印者となり、後には馬關條約の調印者となり、統監としては保護政治の創始者となり運用者となり、或は樞密院の議長となり、遂に復び六十九歳の老軀を提げて北滿洲視察の程に上り、明治四十二年十月廿六日、さしも勳功聲望一世を敷うた身を以て、うたてや

頑冥な蠻人の兇彈に斃れて哈爾濱の露と消えた伊藤博文の一生は、苟くも血性ある男兒をして慨然として起たしめるものがある。けれども瓜の種に茄子はならぬ。公は武士の出でないといふものゝ、その家には正しい武士の血が流れてゐて、たゞ公の先祖が中頃にして歸農したまでであるから、公の言語動作も自ら普通農家の兒童とはその選を異にしてゐて彼の秀吉が全く素性のない家から身を起したのとは事が違つてゐる。

公の本姓は林というて山口縣熊毛郡東荷村の由緒正しい舊家であつたが、伊藤といふのは公の父の代になつて妻子を携へたまゝ株養子に入つた萩の輕卒の家名であつた。そして父は弘化三年に都合があつて萩を出たから、公は當時僅かに六歳の少年であつたが、これから三年ばかりの歳月を母の生家に過ごしたのであつた。かくてその年齢が十二に達したとき、或る家の若黨奉公に出たが、一日、主人がさる家に行いての用談中、天候が俄に變じたので先方の履物を借りて歸り、翌くる日公に命じて借りて來た方を先方へ返し、自分が預けて置いた履物をば取つて歸らせた。公は昨日來の飛

雪は紛々として花を散らす如き中を生命を果たし、先方から履物を受取つて歸つた。途中、風は雪を捲いて寒さは身を切るばかりである。よつて暫らく暖を取らうとして自分の家に立ち寄ると、公の母は少しの容赦もなく公を叱り付け、「主人の命によつて外の使に出た途甲を、寒さに恐れて家に寄るとは、まあ何といふ心得違ひのことであるか。早う歸りなされ。」というて一杯の湯さへ與へず、紫色を帯びた唇が寒さに震へてゐる公をば匆々逐ひ出したのであつた。賢母の薰陶は可憐な少年をして他日の伊藤公たらしめたのであつた。

「予には三人の恩師があるが、第三の恩師として、管に書物を予に授けたばかりではなく、讀書とともに予に武士の精神を教へて呉れたものは、實に來原良藏先生である。先生は姓を多々良といひ、諱を盛吉というて後には盛功と改めたが、その實家は福原といひ、來原良右衛門に養はれてその姓を襲つたのである。福原と來原とは共に長州藩平侍の家で近い親戚の關係を有してゐるのであるが、良藏先生は來原家に入つて嫡子の儲、御祐筆や又は檢使を勤められたのである。予が先生と相見えたのは安政三

年のことであつて、當時、毛利家は幕府の命に依つて鎌倉から宮田に至る相州の沿岸を警護し、藩士は『バラック』の如な板小屋を作つてこれに起臥したが、予は當時年十六、勤番の爲に長藩から派遣されて三十四五人の同輩とともに宮田に赴いた。すると何程も経たないのに先生も亦宮田に来て、予が萩の久保塾に學問に勤しんでゐることを聞き、猶ほ父子に多少見るべき所があると思つたのであらうか、頗る熱心に勤番小屋の中で予に讀書を授けて呉れた。先生は豪膽で克己心に富み、學識も亦深遠で、眞に文武兩道の達人とも申すべく、殊に其の意思の強固な點に至つては予は未だ先生の如な者を見たことが無い。また先生は冬になると毎朝午前四時頃に騎馬提灯を携へて予が小屋に來り、熟睡してゐる予を叩き起し、自分から小脇に抱へてその小屋に連れて行き、蠟燭の光りで予に詩經や書經を教へられた。それ 先生は當だ文字を授けるばかりではなく、武士の精神を予に鼓吹しようとしたものらしく、寒暑共に予に草履を穿くことを許されず、跣足でいつも海岸や山野を跋涉させ、「武士は戰場で如何様な困難に遭遇しないとも限らない。若しと戰地で草履を得ることが出來ぬ場合に、平

生から跋足で歩行する習慣を付けて置かなければ如何する積りであるか。」と戒め、又寒中、予が思はず『寒い』といふと、先生は直ちにこれを聞き答めて『寒いというた處が寒さを凌ぐ道具にはならない。そんな弱音は武士の禁物である。』というて予を戒められるのであつた。斯く先生の子を教へられることは實に懇切を極めて、予に一生忘れることの出来ぬ好教育を興へられた。そして予が十七歳の秋、勤番の満期に達して歸藩しようとする時になると、先生は此先とても猶ほ學問を繼續すべきことを予に諭し、自ら吉田松陰先生に宛てた紹介状を予に與へ、萩に歸着した上は松陰先生に就いて更に攻究を續けるがよろしいと勸告されたのであつた。先生の人格は予の感服措く能はざるところで、其漢學の素養といひ、經世的識見といひ、精神上的の鍛鍊といひ、當時に於て嶄然として群を抜くの觀があつた。或時高杉晋作が予に向つて先生と木戸孝允との人物比較論を問うたから、予は直ちにこれに答へて、『處世の術は木戸の方が先生よりも勝つて居るであらうが、學問・見識・人格に至つては先生が遙か木戸の七に在る。』というたところが、木戸はいつか此評を耳にして、予は木戸から大に不興を

蒙つたことがある。しかし、予は今日に至つても尙ほ斯様に信じてゐる。』とは公が晩年さる昵近者に物語つたところであつた。此の師弟の情の美はしき加減は現今の師弟に取つて誠によい模範である。

明治元年の正月下旬に、公は兵庫縣知事となつて神戸に奉職したが、或る日、木戸孝允は公を訪うて、『今や王政復古の世とはなつたけれども、朝廷は尙ほ微力で天下に號令するに足りないから、薩摩藩では其所領の中から十萬石の土地を朝廷に獻納しようとして相談してゐる相である。よつて毛利家からも戦勝の結果、その領に歸した舊小倉領と石州濱田領の十五萬石とを獻納する様にしては如何かと思ひ、もはや密かに同僚の者とも協議をしたが、貴君の意見は如何か。』と問うた。と公はこれに反對して、『自分は斯様な姑息な處置には同意することが出来ぬ。一體、王政復古といふのは、中古に日本の全土が武門武士の掌中に歸した以前の政治の様にしようとするのに外ならぬ。封建を廢して郡縣となし、兵力と財力とを朝廷に統一して萬事の改良進歩を圖らなければ、西洋諸國に對抗するのは固より思ひも寄らぬことである。故に各藩を廢

して朝廷の権力を直接全國に及ぼすの策を講せねばならぬ。」というた。『成程、尤も議論である。なれども事は全天下大小名の滅亡に關するからして、妄りに其説を口外すべきではない。今からこれを公言したならば、成功するものも却つて失敗に終るであらう。』予の言が實行しられさへすれば、それで結構である。自ら好んで奇矯の言を弄する次第ではない。』斯様な論議の結果、孝允は公の意見に基き、大義名分によつて藩籍奉還の論を立てたのであるが、それと共に公は神戸に在つて郡縣制度採用の廟議の決定を待ち、『國是の綱目』といふ一文を草し、郡縣制度や、兵力及財政統一や、教育の事などに就いて詳かに説き、あらゆる迫害を排して薩・長・土・肥・四藩の藩主が連名でその建白書を朝廷に出すこととなつたのであつた。と各藩でもまたこれに習つてその建白を爲したから、朝廷では明治二年六月、各藩主の請を容れ、藩主を知藩事に任命して政事に當らせたが、同じき四年になつて全く封建を廢して郡縣の制を立てたのであつた。

明治六年、征韓論が廟堂の上にとつた時には、岩倉具視・木戸孝允・大久保利通等

と非征韓論を唱へて廟議を一決させ、十八年には身參議兼宮内卿であつたが特命全權大使となつて、時の參議兼農商務卿西郷従道と共に清國に赴いて天津條約を結び、後、日清戦争が開かれるに及んで、皇軍の向ふ所、海に陸に勝たぬはなく、旭旗堂々として北京を衝くの日もまた遠くはなくなつたので、清國では大に恐れ、二十八年三月十四日、直隸總督内閣大學士李鴻章を全權大使として講和を我に請うたから、時の總理大臣たる公はまた特命全權大臣となり、外相陸奥宗光と共にこれに當り彼國の大使等と馬關の春帆樓に會見して、こゝに清國は朝鮮の獨立國なることを認め、遼東半島と臺灣とを我が國に割讓し、猶は二億兩の償金を支拂ふことを約して四月十七日にその和は成つたのであつた。然るに何事ぞ、同じき二十三日、露・佛・獨の三國は東洋平和の爲めといふを口實にして遼東半島を清國に還附すべきことを申し込んだのであつた。我が忠勇無雙の同胞が血を濺ぎ骨を碎いて讒かに得た遼東半島は、口に平和を唱へて、腹に侵略の刃を藏してゐる猾兒の爲にむざ／＼と取り還されむとするのである。當時、四千萬の同胞は憤恨悲慨、熱して殆んど狂せむとしたが、五月十四日を

以て遼東還附の詔勅が發せられるに及んでは、また如何ともすることが出來ず、遼東は終に還附せられたのであつた。この場合に於ける公の立場の苦しかつたことは言語の外である。殊に當時世界の趨勢から打撃して公は夙に三國の忠言を納れる方針を取つたから、國內輿論の彈劾はその一身に集り、或は國賊と呼ばれ、或は無骨漢と譏られたのであつた。が、天下の大事に際しては、囂々たる輿論の聲よりは寧ろ一豪傑が毅然たる大精神に俟たねばならぬものが多い。三國干渉の大問題が突として我が國を衝くに及んでは當時四千萬の人の聲よりも、公一人の大氣魄が遙かに重くまた尊かつたのであつた。天下は一人を以て興り、一人を以て滅びると云ふのは即ちこゝである。後、日露の戦争を経て韓國が我が國保護の下に置かれるに及んで、日本からは公が統監となつて韓國に渡り、その外交事務を管轄すると共にその内政をも指導して、事蹟は大に揚がつたのであつた。さて明治四十二年、公はその職を副統監であつた曾禰荒介に譲つて樞密院議長の榮冠を得たが、國家多事の際とて公は長くこの職に留ることが出來ず、老軀海を渡つて北滿洲の視察の途に上り終に哈爾濱に偉人なる一死を遂

げたのであつた。けれども、この事があつて間もなく四十三年八月二十九日、韓國は遂に我國に合併されてその國號を廢し、朝鮮というて我が總督府の下に統治せられることゝなつたのであつた。

公は人となり、神を尊ぶの念が厚く、また先輩を敬ふの情が深かつた。或は皇太子殿下御病氣御平癒祈願の爲に、或は皇軍の戦勝祈念の爲に、或は統監の重任を全うせしめられむが爲に、或は皇太子殿下御渡韓の御安泰を祀るが爲に、前後數回、伊勢の大廟に詣でたことなどはその神を尊ぶの念が厚かつたことを知ることが出来る。またその四先輩であつて四恩人であつた三條・岩倉・木戸・大久保の人々を崇敬すること最も深く、大磯滄浪閣の梅林中に一の堂宇を樹てて四人の肖像を掲げ、自らこの四賢の後繼者を以て任じ、ひたすら此の人々の遺志を貫徹しようとしたのを見ても、その先輩を敬ふの念がどんなに深かつたかといふことは譯るのである。人心目を這うて浮薄に流れようとする時に當つて、我等は殊に公が斯様の美點に習はねばならぬ。一身を君國に捧げて芳を千載に傳へる大偉人は流石に本末を誤り、輕重を紊ることはせなん

たのである。

乃木將軍

明治の聖代は我が極東の一帝國をして日清戦争を経て一躍して東洋の日本とならせ、また日露戦争を経て一躍して世界の日本とならせた尊い御代であつたが、世の太平に馴れてやゝともすると優柔情弱に流れようとする一般の人の心を緊張させたものは、實にや聖代最後の幕に演ぜられて赤誠天地を動かし、壯烈鬼神を哭かしたる乃木大將の殉死であつた。聖明毅武に互らせられた明治天皇の歸りまさぬ御幸に事へ奉る傑士として人格百世に高い乃木將軍を得て明治の歴史はその最後のページに爛然たる光彩を放つてゐるのである。

將軍は名を希典というて嘉永二年の十一月十一日、東京の長州藩邸に生れたのであつた。十一月十一日は即ち土月の吉日である。そしてこの土月吉日を以て生れた將軍は實に武士道の權化であつたのであつた。將軍は十一歳の時に江戸から郷里の長府町

へと歸つた。その十一歳の冬のことであつた、鼻水を吸りながら弟の守をしてゐたが、餘りの寒さに思はず、寒さを吐くと、父の希次は將軍を井戸端へ連れ出して物をも言はず、釣瓶で頭から水をかけて、『武士の兒として今日位の寒さに堪へられぬ様で如何する。寒ければいつもかうして温めてやるのぢや。』といふのであつた。また將軍は十四五歳の頃までは武藝よりも寧ろ文學を好んだが、父はこの事を悦ばず、『武士として生れながら文學にのみ耽ける様なことで、まさかの時、我が君様の御役に立つか。』と叱るのであつた。かくの如き教育の間に將軍の精神は鍛鍊されたのであつた。

將軍が武人として戰場に立つたのは、未だ十七歳の少年の時、小倉方面に幕府の追討を受けた折右足に銃傷を負うたとのことである。明治十年、所謂西南の役が起つた時には將軍は歩兵少佐で第十四聯隊長心得を勤めてゐたが、二月二十二日の大激戦には薩摩軍の意氣大いに揚がり、熊本城兵の苦戦は言語の外で、その時參謀長であつた樺山中佐は負傷し、その部下の吉松少佐は戦死し、第三聯隊長の與倉中佐も戦死するといふ有様であつた。ところで此の日、乃木聯隊長は植木方面で敵と大衝突をや

つたが、これまた事の外なる大悪戦で百四十九名の勇士は僅か二十九名に打ちなされ、その上に將軍は左の腿と右の手に銃傷を受け、聯隊旗手であつた河原林少尉は敵弾に倒れた爲め、非常な亂軍の中に軍旗はあはれや敵の手に移つたのであつた。とみる、その聯隊旗は賊軍の爲め、城外の花岡城下の臺場に竹竿の先に結び、我が軍に向つて立てられたのであつた。將軍はこれを望み見て切齒憤慨死を期してこの大失態を暗うたが、後日になつて彼の聯隊旗は鹿兒島のある農家から出て、復もや乃木聯隊に歸り來つたのであつた。將軍は西南戰爭の功を以て中佐に任せられ、これからは非常な順潮に棹して明治十六年には早くも少將に昇つた。そして二十七年、日清の戰爭が開かれると、將軍は第一旅團長となつて出征の途に上り、戦地に在つて中將に任せられ、第二師團長に補せられたが、更に臺灣に轉戦してこゝにまた殊勳を樹て、武勳烈々として凱旋した時を以て功三級之賜はり、爵に列せられたのであつた。

日清戰爭が終へると間もなく將軍は臺灣總督に任せられたが、その在勤一箇年の後を以て將軍の母堂は將軍の任地先になくなつたのであつた。ところで當時はまだ臺

島が我が領土になつて間もなかつたことであるから、彼の地に在つた日本人の心もまたそこへは落ち着かず、従つて死人などが出来れば必ず内地へ持ち還つて葬るのが例であつたのに、將軍はその日の亡骸をば臺灣から程遠からぬ三枚橋の墓地に葬つたのであつた。この間に、美はしい將軍の人格を偲ばせて今にその奥床しさを覚えさせるものがある。かくて歸つてから第十一師團長に補せられたのに、明治三十六年には都合があつて栃木縣西那須野原の開墾地に身を引き小作人と一緒に鋤を振り鋤を把つて農人の生活をしたが、三十七年には例の日露大戰役が起つたので、將軍は第三軍司令官として出征した。そして其年の六月には陸軍大將に陞進した。さるにてもその率ゐる第三軍の打ち向つた旅順の堅壘は流石に露軍が金城湯地として頼んでゐるところだけあつた。將軍が二子勝典・保典は共に此戰爭中に斃れたのである。けれども忠誠無二な我軍が半歳に亘つた包圍攻撃の結果は、終に露軍をして開城するの止むなきに至らしめたのであつた。時は明治三十八年の一月一日である。我が攻圍軍は百一發の祝砲に實弾を籠めて打出した。天は裂け、地は破れてさしもの堅城もたゞ、焰の中に漂うた。

露軍はこゝを必死と防いだ、大勢既に決してまた如何ともすることが出来ない。鶏冠・松樹は落ち、二龍・盤龍また打ち敗れた。こゝに露軍の關東要塞司令官ステツセルは白玉山下の幕營に諸將を喚び集めて軍議を開き、降伏のことを定めたのであつた。白旗は砲煙の間を流れて降伏の書は將軍の手許に傳はつた。將軍はその請ひを容れた。開城の約は成つて水師營に將軍とステツセルとの會見は行はれた。ステツセルは將軍に向つて、『閣下の御令息にはお二人とも旅順に御戦死遊ばされました由で何とも御傷ましきの極みと存じます。』といふ。將軍は起立して、『數にも足らぬ我が兒の二人が二人ともに本國の爲め一命を捧げましたのは、父子の名譽、これに過ぎたることゝて御座りませぬ。ところで閣下には御令息がお有りなされませるか。』と問ふ。『御座ります。』『定めし閣下と、もに旅順におはされるで御座りませう。御達者に互らせられませるか。』かく色々の物語の末に、二鞭を乾盃してからステツセルは己れが乗つて來た蘆毛の馬に打跨がり、將軍の前で乗り廻してその性質の説明をし、將軍に向つて、『この馬を閣下に差上げたう御座ります。何卒私の紀念として御受け下さる様に。』

こいふ。『御志の程は有り難う存じまするが、今茲にこの馬を御受け致すことは出来ませぬ。今やこの馬は日本政府のものに屬して居ります程に、私共の勝手にはならぬので御座ります。』と將軍は答へた。『日露戦争で二子を喪うたが、唯その死に様の如何を心配したで悲しとも惜しとも思はなんだ。一死以て君恩に報ずるのは我れ等の天職である。』とはいつても將軍のいふ所であつた。旅順の堅壘は陥つて將軍の名聲はこゝに爾靈山よりも高くなつた。それから奉天の攻撃に勇名を轟かし、平和の克復と共に赫々たる偉勳を橋て、宇品港へ凱旋すると、潮の如き出迎の人々は歡びの色に包まれて將軍の乗船へまで詰めかけた。しかるに將軍の室は空になつてゐてその影さへに見當らない。さて如何したことか、參謀も副官もその行衛を知らない。捜しに捜した末、ボーイ室の隅に小さくなつてゐる將軍を見出した。と將軍は兩眼を涙に濡はせて、『幾萬かの子弟を殺して歸り來つたのに、かく盛大な御出迎を受けては誠に面目がない。出来ることなら笠笠に身を襲して道からでも逃げて行きたいばかりぢや。』といふたので、人々はたゞその將軍の心事の高潔なのに感じ入るばかりであつた。歸國

勿々將軍は内した。二重橋畔に打ち仰ぐ大楠公の銅像は朝日に映えて將軍の凱旋を
 迎へた。臣希典、不肖に御座りまして旅順に陛下が忠良なる多くの將校士卒を失ひま
 して御座りませぬれば、何とも御申譯御座りませぬ。今はたゞ割腹して罪を陛下に謝
 し奉るべきにて御座りまする。』とは御前に復命した所の將軍が言葉であつた。『卿が割
 腹して朕に謝しようとする誠意の程はよく見えてゐるが、今は卿の死ぬべき時ではな
 い。けれども、如何しても死ぬる積りならば、朕が世を去つた後にして欲しい。』とは將
 軍が御前を拜辭するのをお呼び留めなされて仰せられた明治天皇の玉言であつた。天
 皇の御眼には涙輝き、將軍の眼底には熱涙が輝いた。將軍は軍功を以て旭日桐花大綬
 章を賜はり、功一級の金鷄勳章を授けられ、また伯爵に陞せられた。將軍の偉大な人
 格は一世を蔽うた。明治四十年、明治天皇には華族の子弟の教養に大信心を用ゐられ
 て將軍を學習院の院長になされた。と將軍は『一向に教育もなく學問も無い自分が斯
 様な重大な任務を負うたとして、果してよくこれに堪へ得るか、どうかは頗る疑問であ
 る。誠に恐懼に堪へぬ次第である。』とさる親しい者にいふと、その人は、『いや、陛下

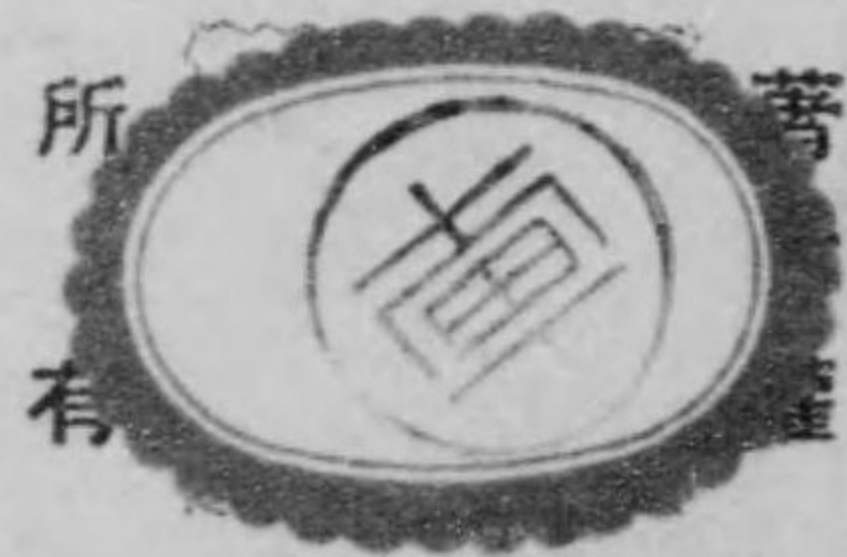
下が大御心のあらせられるところは普通の教育の事ではあらせられまい。普通の教育
 者は世の中に幾らでもあるが、精神上的の教育を貴殿に御托しなされたことであらう。
 教育の素養が無いからというて謙遜なされるには及ぶまい。』といふと、將軍は非常に
 喜んで、性來の忠君愛國の至誠を華族の子弟の上に譲いたのであつた。そして學習院
 が四谷にあつた時分には、晴れた日には馬で通ひ、雨の日には必ず徒歩で勤めたので
 あつた。で或る人が、『何故、雨の日には馬にお乗りなされませぬか。』といふと、將軍は
 肅然として、『さりとて馬も馬丁も可哀想だからのう。』といふのであつた。で將軍は平
 生いたく山鹿素行を慕うてゐたが、晩年になつては素行の著にかゝる上下二冊の
 『中朝事實』と『中朝事實跋文附録』とを手寫してこれを自費で出版し、猶その國體の
 ことを能く説いてある跋文の方をば學習院の學生に與へて教育董陶の資に供したので
 あつた。
 さる程に、明治四十五年、妖雲、九重の宮居に柳曳いて明治天皇には御いたづきに
 臥しまされた。そして久しきに亘つて癒りなされない。將軍は七月二十日、天皇御大

患の由を承ると、必ず日に三回づゝ宮中に奉伺して侍醫から御容態を承り、寢食を忘れて御平癒を禱り奉つた甲斐もなく、その三十日を以て雲がくれなされたので、それからはひたすら自邸に引き籠つて一切の訪問客を断り、たい千萬無量の追慕の情を遣つて居たが、今日しも九月の十三日、朝早く夫人静子と與に自働車に乗つて参内し、天機を奉伺して御靈柩に永の御訣れを告げ、歸邸後は軍服のまゝ、厩舎に行いて二頭の愛馬にカステラを與へ、居間に引き籠つて夕暮近くなると、その机上に帛を布き、今しも御靈柩が青山假停車場を離れなされる時刻に正面高く明治天皇の御像を掲げ奉つて端然として禮拜すること三たび、軍刀に伏して斃れ、夫人は大將と相對して白羽二重の衣服の上に黒い喪服を着け、七首に伏して鮮血の中に玉の緒を断つたのであつた。『神あがりあがりましぬる大君のみおとはるかにおろがみまつる。』『うつし世を神さりましゝ大君のみあとしたひて我はゆくなり。』とは將軍の辭世で、『いでましてかへります日となしと聞く今日の御幸に逢ふぞかなしき。』とは夫人の辭世であつた。日本武人の典型として將軍の靈は萬古碧落に懸かり、日本婦人の龜鑑として夫

人の魂は千古山川に布くのである。繰り返していふが明治聖代の幕は斯くの如き奕々たる精彩の中に閉ぢられたのであつた。

□付與卷下傑百本日傳史年少□

大正九年四月十五日印刷
大正九年五月六日發行



著者

大町桂月

發行者

東京市神田區南神保町三番地
日新聞代表者
足立四郎吉

印刷者

東京市京橋區本八丁堀四丁目五番地
古川健作

印刷所

東京市京橋區本八丁堀四丁目五番地
株式會社 共榮舍印刷所

發行所

東京市神田區南神保町三番地
株式會社 日新閣

電話九段一三九三番
振替東京一三九一番

定價金壹圓拾錢

株式會社 日新閣新刊書目

<p>□佐藤鐵太郎中將述□久遠の生命□ <small>送料金一圓七十錢</small></p>	<p>□釋宗演禪師著□快人快馬□ <small>送料金一圓五十錢</small></p>	<p>□菅原時保禪師著□電光石火□ <small>送料金一圓五十錢</small></p>	<p>□岡野辰之助氏著□八時間勞働問題□ <small>送料金一圓八十錢</small></p>	<p>□<small>內務省 囑託</small>天野藤男氏著□地方の婦人へ□ <small>送料金一圓五十錢</small></p>	<p>□大泉黑石氏著□<small>ロシヤ 秘話</small>闇を行く人□ <small>送料金十二錢</small></p>	<p>□<small>文學 士</small>板垣邦器氏著□<small>東海道 行脚</small>頭陀袋より□ <small>送料金八十五錢</small></p>	<p>□生方敏郎氏著□<small>洋服 細民の</small>悲しい笑ひ□ <small>送料金一圓七十錢</small></p>	<p>□村松梢風氏著□燈影綺談□ <small>送料金一圓七十錢</small></p>	<p>□<small>法學 博士</small>沼淑郎先生著□<small>社會 思想</small>及<small>社會 組織</small>の研究□ <small>送料金一圓三十錢</small></p>	<p>□田中貢太郎氏著□春宵綺語□ <small>送料金一圓七十錢</small></p>
--	---	--	---	--	---	---	---	---	---	--

384
162

19:6.23

終